

# 青柳寄居遺跡

発掘調査報告書

昭和 58 年度

前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
株式会社 佐田住宅センター







## 序

株式会社 佐田住宅センターによる貸店舗建設予定地は、旧利根川の流路内であり、周辺に、遺跡や遺物の発見は、極めて少ないところでした。

しかし、試掘により、遺跡の存在が確認され、発掘調査のはこびとなりました。

その結果、平安時代の水田の畦、棚を持つ住居跡や、きり、やりがんななどの鉄製品を持つ住居跡、土壤、柱穴群などが発見されました。いくたびかの洪水による災害、あるいは火山灰降下による災害を受けながらも、人々はこの地域に、古くから生活の根を下ろしていたことが解ったのです。

また、現地説明会には、地元の多数の皆様に参加していただき、埋蔵文化財に対する理解と関心を深めていただく良い機会も作ることができました。

現在、個人や民間企業により、様々な地域開発が行なわれています。その中で、地域の歴史を解明する貴重な手がかりを得られましたのは、この発掘調査のために、発掘費用を全面的に負担していただいたのみならず、事務所や用具、および重機の使用に至るまで、全面的なご協力を惜しまれなかった、株式会社 佐田住宅センター、をはじめ、発掘調査に参加していただいた多くの方々のおかげと厚く感謝申し上げます。

なお、本報告書が、多くの方々に、ご活用いただければ、幸いと思います。

昭和59年3月31日

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 佐藤寅夫



## 凡 例

- 1 本書は、株式会社 佐田住宅センターによる貸店舗建設予定地内の、埋蔵文化財発掘調査についての報告書である。なお遺跡の略称は、58B1とする。
- 2 調査は、株式会社 佐田住宅センターの依頼により、前橋市教育委員会、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が行った。
- 3 調査担当者および調査期間等

所 在 地 前橋市青柳町字寄居198番地。  
調 査 期 間 昭和58年10月24日～昭和58年12月29日  
担 当 者 前原照子、岸田治男、井野修二、鶴木晋一、中野和夫、前原 豊、木暮 誠  
福田端穂  
事務担当者 福田紀雄、布施和男、町田信之  
調 査 面 積 1,800m<sup>2</sup>
- 4 本書の執筆および編集は、主に前原照子が担当し、遺物整理、図面整理、図版作成、遺物写真等は、担当者および整理作業員が分担した。なお、遺構全体の測量は、株式会社“測設”に花粉分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 5 地質同定については、群馬大学教授新井房夫氏の御教示を賜った。
- 6 本調査における出土遺物、実測図、写真等は一括して前橋市教育委員会で保管している。
- 7 本書の内容は、以下の原則のもとに執筆にあたった。
  - A 住居跡の遺構平面および遺物分布を示す図は、地断図とも60分の1の縮尺であるが、遺地断図のみ30分の1の縮尺である。遺物は2分の1、4分の1、6分の1である。
  - B 同図中のスクリーントーン部分は、特にことわり書きがない限り、次のことを表わす。
  - C 土器の分類について ロクロ整形で窯で焼かれたものは、酸化焰焼成であっても須恵器とした。
  - D 須恵器は高台のないものを坏、高台のあるものを掩とした。
  - E 本文中の出土遺物の記述は原則として、挿図・図版・観察表で取り上げたもの以外も含めた概観である。なお、出土遺物観察表は別冊とした。
  - F 遺構、その他の略称は次の通りである。

H……住居跡、D……土壤または土坑、T……竪穴状遺構、W……河川、P……ピット  
p……遺物（地断中）、S……石

# 目 次

## 序 文 目 次 凡 例

I 遺跡の位置と環境.....	1
II 発掘調査の概要（1 調査にいたるまで..... 2 調査方法..... 3）	
III 標準土層および遺跡内の土層について.....	4
IV 遺構と遺物	
1 平安時代の住居	
H-1号住居跡.....	5
H-3号住居跡.....	8
H-5号住居跡.....	14
H-7号住居跡.....	27
H-9号住居跡.....	31
H-11号住居跡.....	35
H-2号住居跡.....	7
H-4号住居跡.....	10
H-6号住居跡.....	17
H-8号住居跡.....	29
H-10号住居跡.....	32
H-12号住居跡.....	37
2 水田跡.....	39
3 土 壤.....	43
4 柱 穴 群.....	46
5 小河川跡.....	47
V ま と め.....	47
付編 花粉分析結果.....	49

調査ならびに本書作成にかかわった方々は、次の通りである。記して感謝する次第である。

### 発掘作業員

加部二生	河村文子	小林京子	小林ハナ子	小鯛ユキ	佐藤真寿雄
佐藤佳子	塩野操	瀬下麗子	関口安次郎	高島康	角田弘子
角田もと江	都丸明美	登丸タケ	長岡徳治	中川保	中川千代
中島トリ	中島ツル	中村五七	長谷川ヨキ	長谷川千代乃	原口ことこ
松本伯子	宮石明彦	宮下マサ	桃井富子	吉野勝美	矢作春江

### 整理作業員

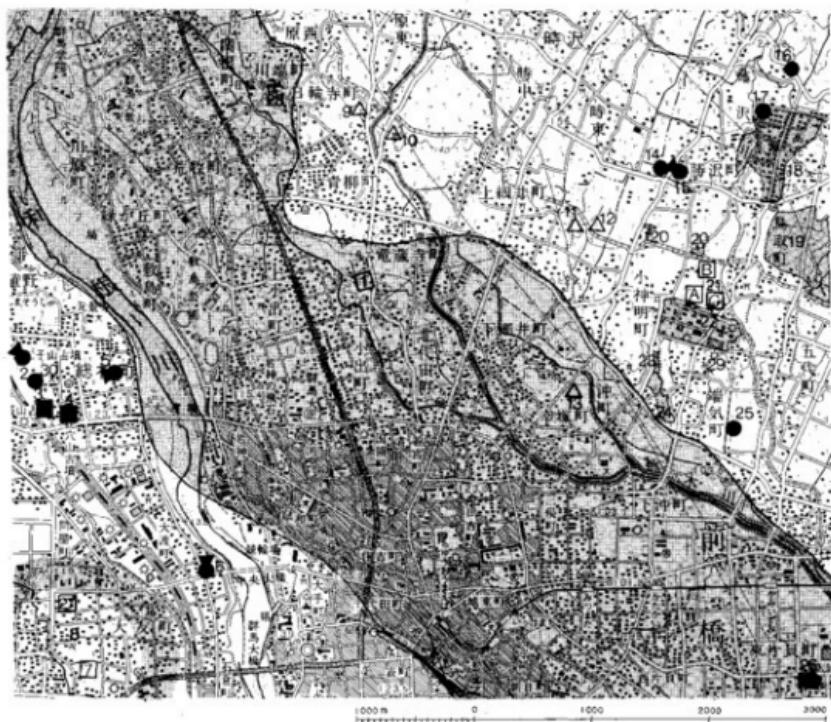
青柳宏枝	柴崎まさ子	須藤 宏	住谷文彦	松本 保	宮石明彦
吉野勝美					

### 整理協力員

中野 覚	浜田博一	原田和博
------	------	------

## I 遺跡の位置と環境

前橋市は、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）および两者に挟まれて地溝状になった沖積低地（広瀬川低地帯）、そして現利根川氾濫原の四地域に分けられる<sup>(1)</sup>。青柳寄居遺跡の立地する広瀬川低地帯は赤城火山の山麓崖と前橋台地の北東縁をなす崖に挟まれ、約2.5～3 kmの幅をもって前橋市の北西部から南東部にのびている。旧利根川の氾濫原であるこの低地は現在、広瀬川、桃ノ木川、および白川その他の小河川や用水がそれぞれ



- 1 青柳寄居遺跡 2 二子山古墳 3 宝塔山古墳 4 蛇穴山古墳 5 遠見山古墳 6 王山古墳 7 元社明神遺跡  
8 推定同府跡 9 青柳宿上遺跡 10 宿上遺跡 11 丑子塚遺跡 12 四田之口遺跡 13 西新井遺跡 14 オブ塚西古墳  
15 オブ塚古墳 16 東公田古墳 17 桂川田畠荷古墳 18 芳賀北部団地遺跡 19 芳賀東部団地遺跡 20 小神明遺跡群I  
21-A 倉本遺跡 21-B 九糸遺跡 21-C 西田遺跡 22 芳賀西部団地遺跡 23 滅氣遺跡群II 24 滅氣遺跡群I  
25 大日塚古墳 26 大塚古墳 27 関泉橋遺跡 28 日輪寺 29 善勝寺 30 愛宕山古墳  
○スクリーントーンは広瀬川低地帯

第1図 周辺の地形と遺跡分布

合流あるいは分流しつつ南東流している。また自然堤防や小扇状地と見られる高まりもあり集落や桑園が発達しているところが多い<sup>(2)</sup>。この青柳寄居遺跡もそのような微高地にあたり、東方500mに白川、西方100mに桃ノ木川が流れ、北方230m前後で赤城火山斜面に形成された白川扇状地の末端部となっている。調査直前までは耕作面で標高117.7m前後の水田であったが近年畑地の上土を抜いて作田したことである。

青柳寄居遺跡は、前橋市青柳町198番地に所在し津久田停留所前橋線（通称石井県道）西沿いで南側に桑畠と神明宮の森を望む。西側は桃ノ木川までは水田と桑畠が混じり、西岸の国道17号線沿いの住宅地となる。北西から北、さらに東側には帯状の水田が連なり南東に延び、水田を隔てた北東は赤城山の裾野の傾斜が始まる。しかし、近年急速に市街化が進み、景観は大きく変わりつつある。

周辺の遺跡としては、總社・元總社地区利根川右岸近くに、6世紀前半に川原石で構築された王山古墳、6世紀末から7世紀初頭の構築で前方部、後円部共に石室を持つ二子山古墳、7世紀に構築と考えられる巨石巨室を持つ愛宕山古墳、主軸長70mの遠見山古墳、高い石造技術で造られた石室を持つ終末期の宝塔山古墳および蛇穴山古墳があり、古墳時代後期、この地に有力な豪族の存在<sup>(3)</sup>を窺うことができる。また奈良・平安時代の地方の政治と文化の中心地である国府の地と考えられる元總社地区では、近年区画整理に伴い、57・58年度に元總社明神遺跡が調査され、古墳・平安両時代の住居の他、上幅7m、深さ2mの大溝等が検出された。一方赤城火山斜面上では、芳賀東部団地遺跡で、縄文時代の竪穴住居58、古墳4、奈良・平安時代の竪穴住居495、平安時代の堀立造構187、製鉄跡2等。芳賀北部団地遺跡では、縄文時代の竪穴住居31、奈良・平安時代の竪穴住居495、製鉄跡9等。芳賀西部団地遺跡では、縄文時代の竪穴住居7、古墳31、中近世の井戸等が大規模に調査され、報告書の刊行準備中である。また57年度・58年度調査の小神明遺跡群（58年度分は小字により倉本遺跡、九科遺跡、西田遺跡に分かれる。）・端氣遺跡群では、縄文前期から後期、弥生後期、古墳前期後半から後期前半、奈良・平安時代の住居、中世以後の環濠、井戸、土壙等 連綿と続くこの地域の歴史を物語る遺構が検出された。その他青柳遺跡で古墳時代、宿上遺跡で奈良時代、丑子塚遺跡で平安時代のそれぞれ竪穴住居が確認され、古墳では6世紀中頃の箱式棺状石室を持つオブ塚西古墳、市指定史跡の前方後円横穴式であるオブ塚古墳、7世紀前半の横穴式石室を持つ大日塚古墳、7世紀後半と見られる横穴式の桂正田稻荷古墳および東公田古墳があげられる。以上のように多くの遺跡を見ることのできる前橋台地上と赤城火山斜面に挟まれて、この青柳寄居遺跡の存在する広瀬川低地帯では、わずかに縄文後期から晩期の西新井遺跡、6世紀後半の前方後円横穴式の大塚古墳が見られるのみである。しかし、自然堤防と見られる微高地では、遺物の散布も見られるので、今後遺跡が検出される可能性は大きい。

(注1) (注2) 尾崎喜左雄、新井房夫他「前橋市史」第1巻 1971年 前橋市  
(注3) 有馬君とみられる。同「前橋市史」

## II 発掘調査の概要

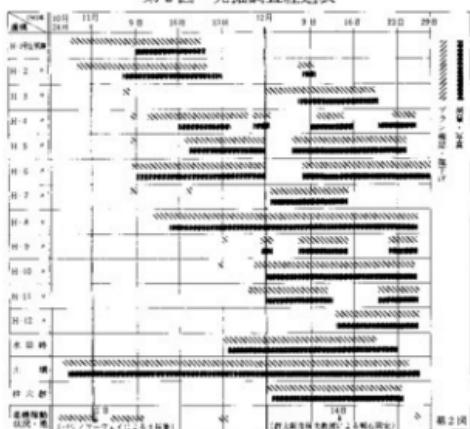
### 1 調査にいたるまで

昭和58年6月株式会社佐田住宅センターより、宅地開発事業計画事前協議書が建築指導課へ提出され、同課より、教育委員会社会教育課文化財保護係に、同協議書に対する意見書の提出を求められる。同7月 当該地区のマッピング調査を行い、試掘調査の必要ある旨、建築指導課へ提出する。ただちに、株式会社佐田センターと確認調査の実施およびその結果により発掘調査を行うことについて協議し合意する。同9月、試掘調査の結果、住居跡、土壤等が発見され、発掘調査の必要が確認される。同10月株式会社佐田住宅センターより、発掘調査依頼書が提出され、10月17日、埋蔵文化財発掘調査委託契約書が同社と前橋市埋蔵文化財発掘調査団で締結された。

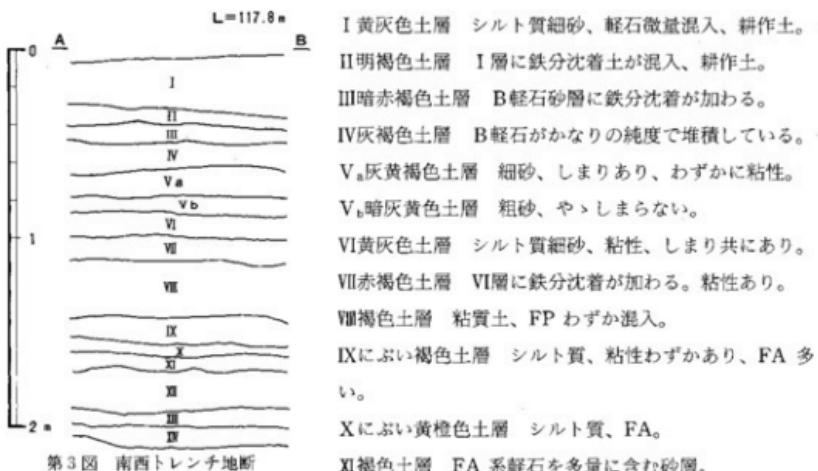
### 2 調査方法

最初、バックホーによって、遺構の存在がある程度予想されるまで表土を剥ぎ、人力によって確認した後、移殖ごてによる手掘りで作業を進めた。遺構の位置をおさえるため調査区に4mのメッシュを設定し経線は西より0・1・2……11、緯線は北よりY・Z・A・B……Lとした。グリット名は西北杭名で表わした。国家座標のとりつけの結果、Z-7グリットはX=+46296.265、Y=-68346.510であり、7ラインの方向角は176°27'25"である。レベルは、遺跡の北西約250mの三角点119.7mを移してグリット表示 I 5 杭を117.40mの高さとして調査を進めた。出土遺物については原則として、出土地点、レベル、傾斜方向等を記録した。なお図面上の北は、真北を表わしている。

第2図 発掘調査経過表



### III 標準土層および遺跡内の土層について



XII黒褐色土層 シルト質細砂、粘性、しまり共あり、C軽石微量混入、泥炭質。 XIII暗灰色土層 シルト質、粘性なし。 XIV黒色土層 シルト質細砂、粘性あり、C軽石25%混入。

本遺跡の土層については、調査域の四方に深さ2m余りの深掘りを入れ、観察と実測を行なつた<sup>(1)</sup>。遺構が検出する層と合わせて見た結果南西の深掘りで検出された層を基準に調査を進めることとした。また4か所の深掘りの地層を比較検討することにより、本遺跡の土砂の堆積状況について次のことが解った。<sup>(2)</sup>①水田の耕作面であった現地表は、標高117.7mから117.8mでほとんど平らである。②浅間B層の堆積時には北東部分が他の部分に比べ10cm～20cm高くなっている。③V<sub>a</sub>・V<sub>b</sub>層である河原砂の層は南西部に厚く(25cm)北西部にははっきりした堆積が見られない。④FAの堆積は南側で顕著に見られるが、北側にはほとんど見られない。⑤C軽石が多く混じる黒色土層(XIV層)の上面は北東で高く南西で低い。比高は47cmで勾配をもつ南向きの斜面であったと考えられる。

V<sub>a</sub>・V<sub>b</sub>層は肉眼で見るとほとんど河原砂である。しかし、普通の河原砂と違い、角のとれていない角閃石安山岩の細粒である。榛名山二ツ岳の噴出物であるFA・FPに起源を持つ砂粒が、榛名山麓から洪水で押し流され、この地に留まつたと見られる。利根川系の砂粒が全く混じらないことに特異性がある<sup>(2)</sup>。

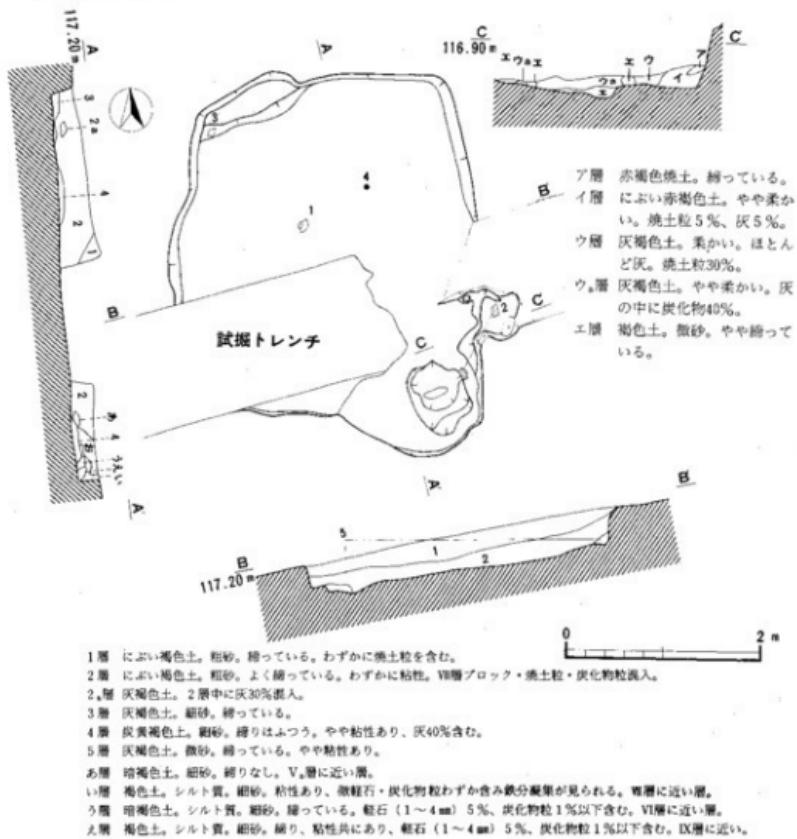
(註1) 第2図 青柳寄居遺跡遺構全体図中に深掘りの位置およびセクションポイントがある。

(註2) 群馬大学新井房夫教授の同定と見解である。

## IV 遺構と遺物

### 1 平安時代の住居跡

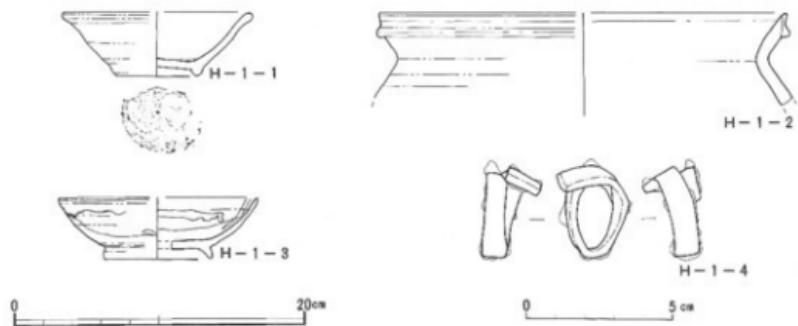
H-1号住居跡



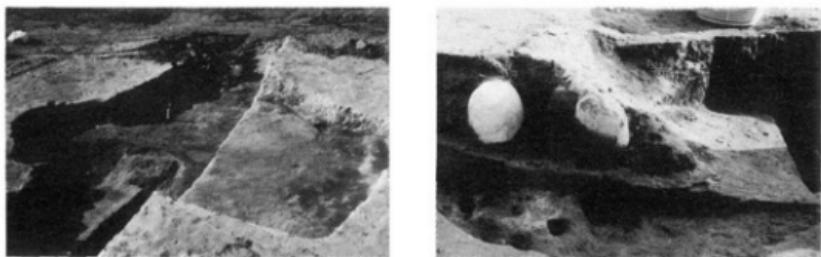
第4図 H-1号住居跡(1/60)

本住居跡は、遺跡の中央やや西寄り、E 3・F 3・E 4・F 4グリットに位置し、北にH-6号住居跡、西にH-2・3号住居跡を臨む。住居確認面はV<sub>b</sub>層。主軸方向は、N-88.5°-W。規模は、長軸3.46m、短軸3.04mの不整正方形で北壁と東壁はほぼ直角に交わるが、北壁と西壁、南壁と東壁は直角に交わらない。南壁は東寄りで弧状に張り出し、北壁は西寄りでやや張らみを呈す。面積は10.46m<sup>2</sup>である。試掘の際、竈左袖を含み住居中央部が大きく破壊されて南西コーナーも無いため全体像はつかみにくい。住居内はV<sub>a</sub>層に近い土砂で埋まっているが、下部はVII層の小

ブロックがわずか混入し、大きく2層に分かれる。南壁は垂直に近く、他の三壁はわずかな傾斜で立上り、壁高は最大で29cmを測る。床はⅧ層を切って形成され、東半分は西半分より低く、最深部で10cmの差を測る。貯藏穴は南東隅で長軸80cm・短軸57cmの長方形に近い形で、内部は不整の擂鉢型、最深部で深さ21cmを測る。窓は東壁南寄りで、軸線方向はN-85°-W。燃焼部には扁平な河原石（長径25cm前後）を側壁及び袖に使用し、粘土で固定している。左壁は全く残存しないが、石を立てた跡と考えられる凹みが見られる。掘り形内面までよく焼けている。出土遺物は113片を数え、住居跡全域に散布していた。土師器の割合は非常に少なく、壺・壺それぞれ1個体の一部が検出されたに過ぎない。羽釜の鈴を含めた口縁部の出土はないが、その底部と思われるものが検出されている。灰釉陶器は、皿・壺のそれぞれ2個体分、壺の底部に近い胸部のそれぞれ一部が検出された。

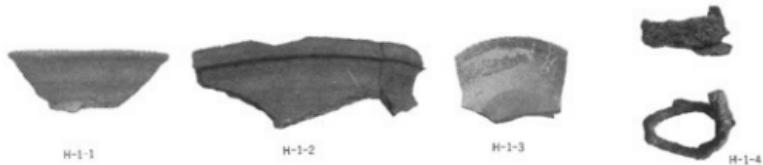


第5図 H-1号住居跡出土遺物(1/2, 1/4)



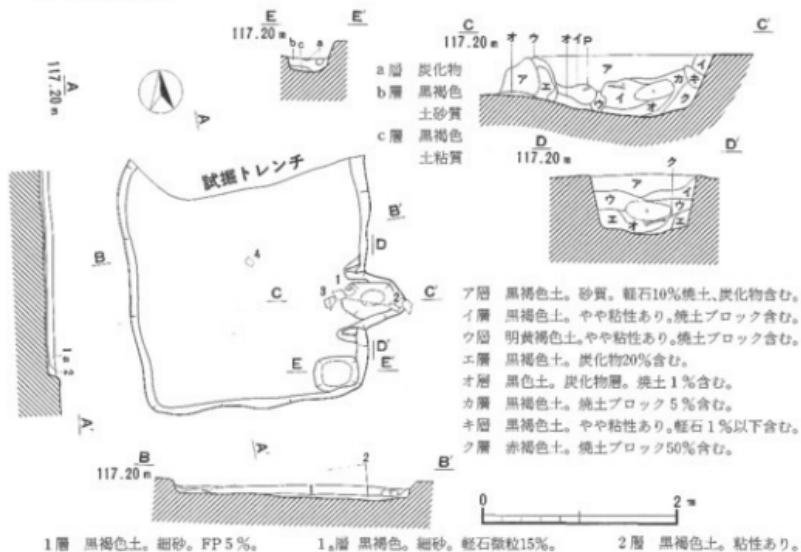
H-1号住居跡

H-1号住居跡窓

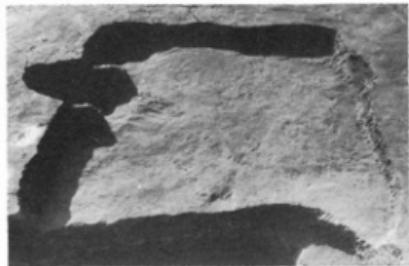


図版1 H-1号住居跡および出土遺物

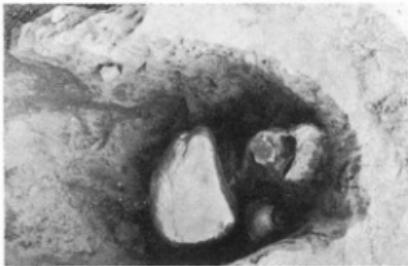
## H-2号住居跡



第6図 H-2号住居跡(1/60)



図版2 H-2号住居跡

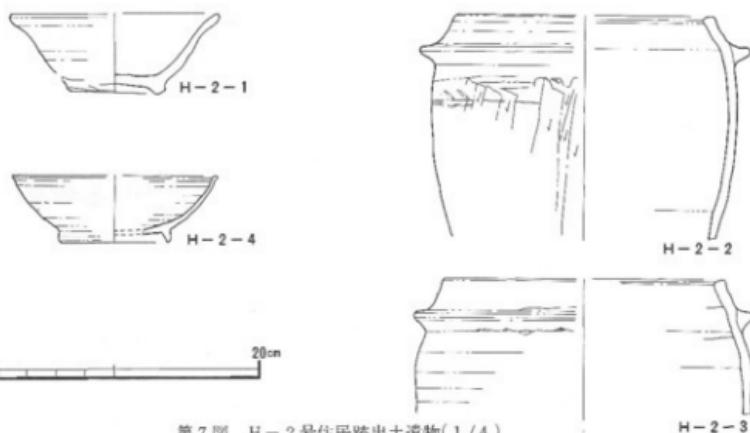


H-2号住居跡竪

本住居跡は、遺跡の西際やや南寄り、F 1・G 1・F 2・G 2グリットに位置し、北西にH-3号住居跡、北東にH-1号住居跡を臨む。住居確認面はVI層上面である。なお、本住居跡、H-3号住居跡および掘立遺構跡と見られる柱穴群の位置する遺跡の西際寄りは、V<sub>b</sub>層の堆積がなく、V<sub>a</sub>層のみ見られる。主軸方向は、N-89.5°-E。規模は、長軸2.7m、短軸2.4m、面積6.87m<sup>2</sup>であるが、北辺は試掘トレンチでほとんど切られているので、長軸および面積は推定であり、形態は正方形に近いと考えられる。住居内はV<sub>a</sub>、V<sub>b</sub>のどちらとも言えない砂質層とVI層に近い粘質土層の2層に分かれる。浅い壁はわずかの傾斜で立ち上り、壁高は最大18cmを測る。床は、V<sub>b</sub>層をわずか切って形成され、ほぼ平らである。貯蔵穴は、南東隅に密着して存在し長軸45cm、短軸35

cm、の隅円長方形を呈し、深さは床面から15cmあり、底はほぼ平らである。竈は、住居東側南寄りの壁を切込んで構築され、住居内に、地山を造り出し、VII層に近い粘性のある褐色土で覆って造られた袖が残っている。竈の軸線方向はN-86.5°-W、掘り方で煙道方向85cm、両袖方向45cm、深さ50cmを測る。なお、竈天井部に使ったと見られる長軸30cm、短軸18cm、厚さ8cmの扁平な河原石が内部に検出された。

出土遺物は、96片を数え、竈内部からその周辺にかけて特に密な散布状況が見られた。土師器は竈1個体の一部が検出されたに過ぎない。羽釜は、鉢の部分で3個体分出土し、灰釉陶器は、皿、碗、壺、長頸瓶それぞれ1個体の一部が検出された。その他楕円鉄滓2塊が出土している。なお、竈内出土遺物は、高台塊(遺物番号1)1個の他は、羽釜の破片が多く、貯蔵穴内部からは遺物の出土は見られなかった。



第7図 H-2号住居跡出土遺物(1/4)



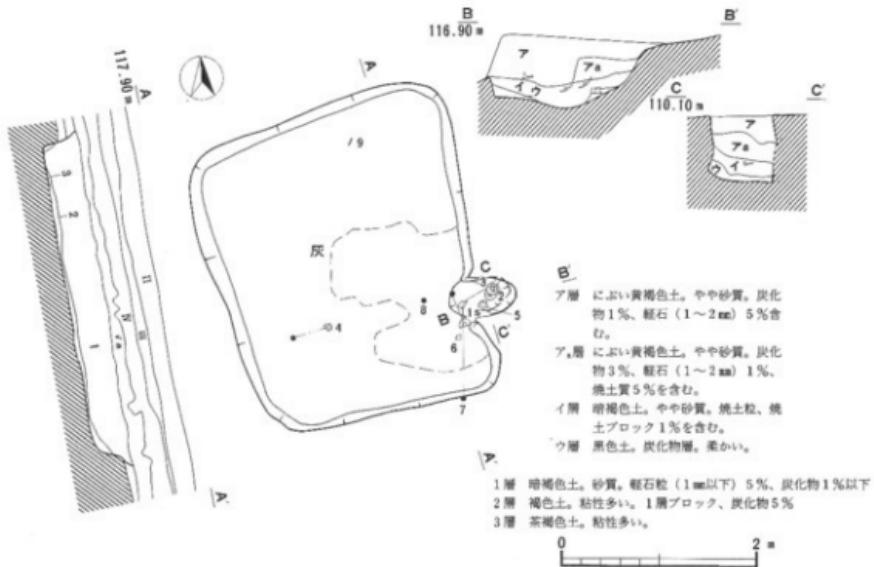
図版3 H-2号住居跡遺物

### H-3号住居跡

本住居跡は、遺跡の西際やや北寄り、E0・F0・E1・F1グリットに位置し、南東にH-2号住居跡を臨む。住居確認面はVI層上面である。主軸方向は、N-78.5°-E。規模は、長軸3.18m、短軸2.6m、面積8.3m<sup>2</sup>である。形態は、台形に近い隅円の不整長方形を呈す。住居内は2層の堆積を示し、上層はV<sub>6</sub>層に近い砂層で、下層はVI層に近い。壁はおよそ80°度の傾斜で立ち上がり、

壁高は最大34cmを測る。床は、Ⅶ層を切り込んで形成され、床面の凹凸は少なく、4cm内外のレベル差でおさまる。貼り床は、全面に亘って4~5cmの厚さで施されている。灰は竈前から住居中央部にかけ薄く分布している。竈は、住居東側、南寄りの壁を切り込んで構築され、右袖に長軸30cm、短軸25cm、厚さ10cmの扁平な河原石が残存。竈の軸線方向は、N=85.2°E、掘り方で煙道方向73cm、両軸方向70cm、深さ46cmを測る。軸線よりやゝ北寄りに、長形の石の支脚を持つ。なお支脚上には、須恵器塊(H-3-3)が被さった状態で検出された。

出土遺物は、105片を数え竈内部からその周辺に特に密な散布状況が見られる。その内容を見れば、土師器は壺一個体の部分に過ぎない。羽釜は、鉢の部分で2個体分出土し、灰釉陶器は、塊2個体分の一部が検出された。なお錐の先が出土したことが特筆される。



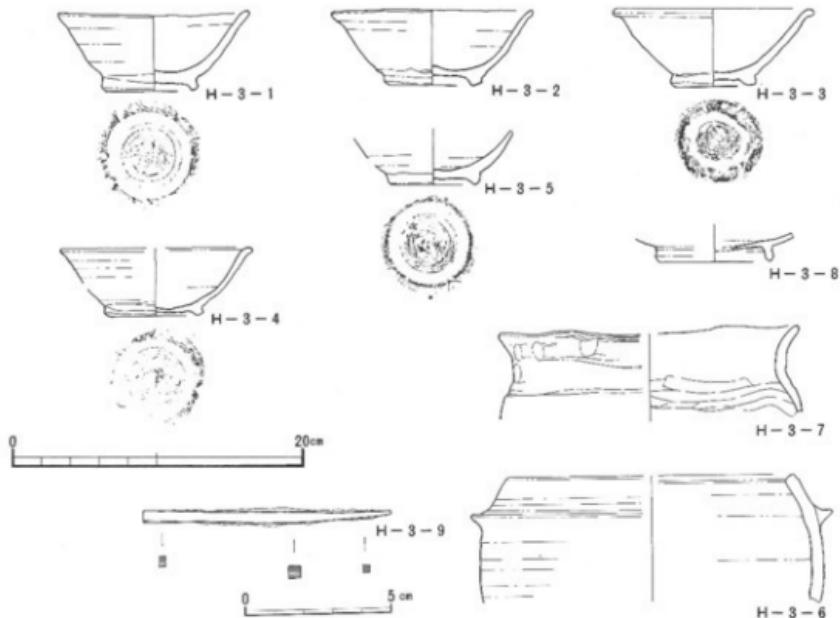
第8図 H-3号住居跡(1/60)



図版4 H-3号住居跡



H-3号住居跡竈



第9図 H-3号住居跡出土遺物(1/2、1/4)

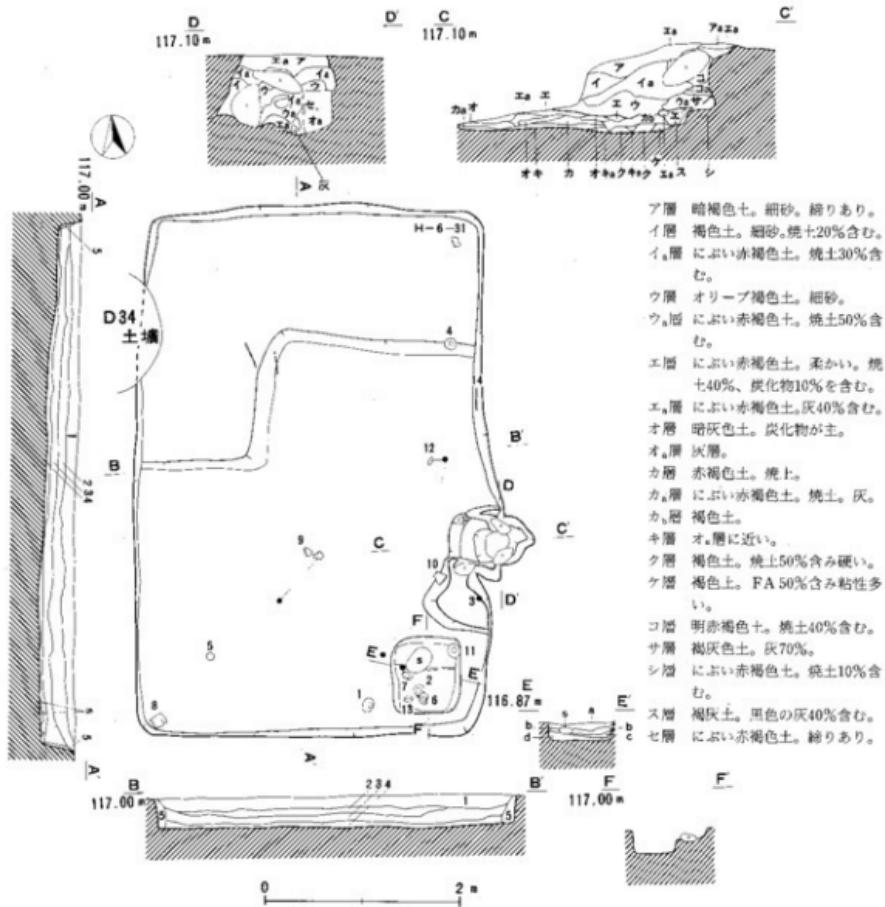


図版5 H-3号住居跡出土遺物

#### H-4号住居

本住居跡は、遺跡の北寄りZ3・A3・Z4・A4グリットに位置し、北にH-9号住居跡、南西にH-5号住居跡、南にH-6号住居跡、距離を置いて東にH-7号住居跡を臨む。住居確認面は、V<sub>b</sub>層であるが、V<sub>b</sub>層は、河原砂様であるため、住居壁がはっきりつかめるのはVI層上面となる。主軸方向は、N-86.5°-W。規模は、長軸5.42m、短軸3.68m、面積18.97m<sup>2</sup>で、形態は

長方形である。D34土壤にわずかに切られて壁の一部を欠く。住居内は、4層の堆積が見られ、上部2層はV<sub>a</sub>層に近い砂質の多い層であり、第3層はVII層の再堆積層である。第4層は床面直上層となり、炭化物粒子(Φ1cm以下)と灰状の物質が混入した緻密なシルト質の黒褐色土である。南・北壁は80度の傾斜を持ち、東西壁は85度の傾斜を持って立ち上がっている。壁高は36.5cm~24cm



ア層 暗褐色土。細砂。綿りあり。  
 イ層 褐色土。細砂。焼土20%含む。  
 イ<sub>a</sub>層 にぶい赤褐色土。焼土30%含む。  
 ウ層 オリーブ褐色土。細砂。  
 ウ<sub>a</sub>層 にぶい赤褐色土。焼土50%含む。  
 エ層 にぶい赤褐色土。柔かい。焼土40%、炭化物10%を含む。  
 エ<sub>a</sub>層 にぶい赤褐色土。灰40%含む。  
 オ層 暗灰色土。炭化物が主。  
 オ<sub>a</sub>層 灰層。  
 カ層 赤褐色土。焼土。  
 カ<sub>a</sub>層 にぶい赤褐色土。焼土。灰。  
 カ<sub>b</sub>層 褐色土。  
 キ層 オ<sub>a</sub>層に近い。  
 ク層 褐色土。焼土50%含み硬い。  
 ケ層 褐色土。FA 50%含み粘性多い。  
 コ層 明赤褐色土。焼土40%含む。  
 サ層 褐灰色土。灰70%。  
 シ層 にぶい赤褐色土。焼土10%含む。  
 ス層 褐灰土。黒色の灰40%含む。  
 セ層 にぶい赤褐色土。綿りあり。

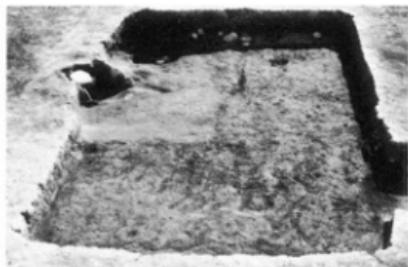
1層 にぶい黄褐色土。砂質。軽石粒5%。焼土ブロック3%を含む。綿りあり。  
 2層 暗褐色土。細砂。軽石粒2%、焼土粒2%を含む。  
 3層 褐色土。炭化物粒3%、軽石粒2%。柔かい。  
 4層 黒褐色土。シルト質。粘性あり。炭化物粒(Φ1cm以下)10%混入。  
 5層 暗オリーブ褐色土。緻密なシルト質。粘性強くよく縮っている。

a層 黒褐色土。砂質。炭化物15%、灰10%を含む。  
 b層 オリーブ黑色土。乳白色切り葉繊維70%。  
 c層 黒褐色土。  
 d層 暗褐色土。

第10図 H-4号住居跡(1/60)

を測る。床は、Ⅷ層をわずかに切って形成されている。床面は、北壁から西壁半ば添いに上幅で1.3m、下幅では1.5m、高さで3cmのカギ型のわずかな高まりが見られる。なお、貯蔵穴周辺はわずかに低いが、全般的に凹凸は少ない。地断の第4層に見られる炭化物は、床直上にかなり広い範囲で見られる。貼り床は暗灰黄色の細砂が、厚さ4cm前後、よく締った状態で施されている。貼り床下には、東・西・南壁から中心がほぼ1.6mの等距離にある皿状ピットがある。床面からの深さ15cm、長軸56cm、短軸50cmを呈し、灰・炭化物が堆積していた。貯蔵穴は、住居南東角に添い、壁から15~30cm離れ存在し、長辺77cm、短辺70cmの方形を呈す。内部は北側が棚状を呈し、深さは棚上で10cm棚下で24cmを測る。竈は、住居東側南寄りの壁を切って構築され、奥壁部分にハの字型に2石、右袖部分に1石の転石（奥壁1石は上部が平らに截石してある。）が使用されている。さらにハの字状の2石の上部には、長軸（44cm）を竈軸に直交させるように、短軸28cm、厚さ13cmの扁平な転石が煙道部に添うように斜めに置かれ、どの石も焼けた部分、煤の付着した部分を持っている。なお、右袖部分は石が抜かれたと考えられる。竈の軸線方向はN-93.5°-E掘り方で、煙道方向78cm、両袖方向55cm、深さ46cmを測る。

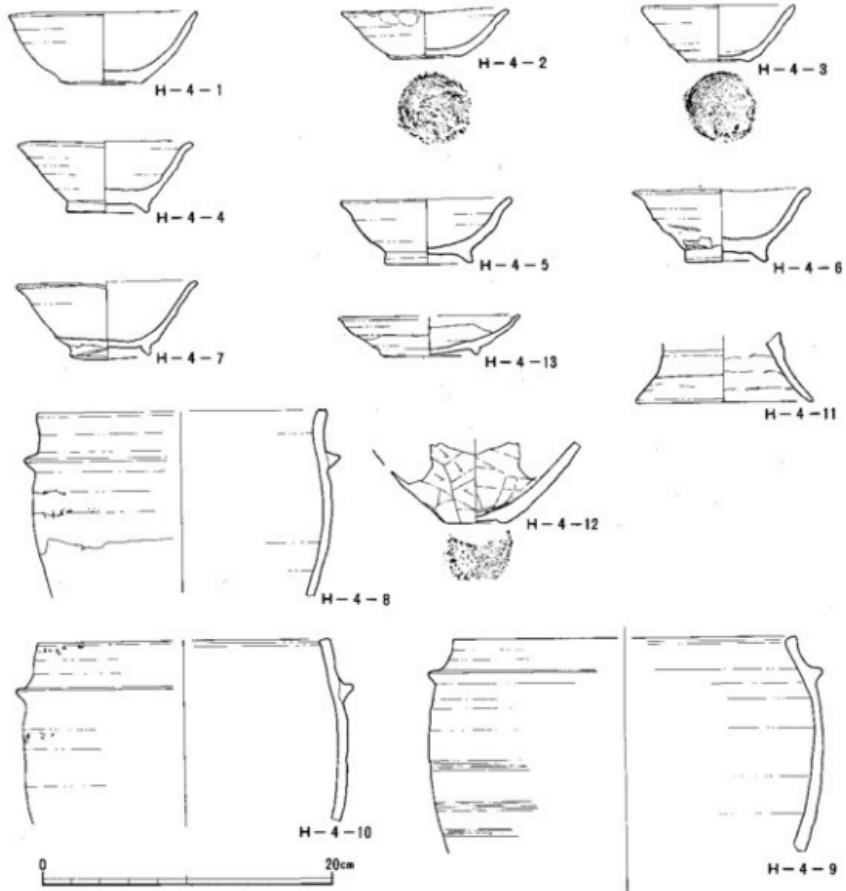
出土遺物は、208片を数え、貯蔵穴内からは、完形もしくはそれに近い壊・塊が集中して検出された。土師器に類する遺物の出土は、土師質皿と思われる個体の部分のみであった。羽釜の口縁部は、4個体分、灰釉陶器は、広口瓶1個体分、須恵器壺2個体分の一部が検出された。鉄製品では、図示した遺物の他、紡錘車の軸と思われる棒状の鉄製品が2本（H-4-74、H-4-143）検出された。なお、広口瓶の口頭部破片（標高117m）須恵器壺破片（標高116.9m）は、H-6-31・H-6-25にそれぞれ接合する破片である。さらに灰釉陶器破片H-4-103（登録番号）もH-6号住居の塊と接合する。H-6-25に接合する壺破片は、竈煙道部を被う形で置かれた石直上にあり、熱を受けて焼けた土に覆われていた。但し、他2片は床面からかなり高い位置の出土であるので、流れ込みの可能性は大きい。なお、住居内南側には、小児の頭大から大人の拳大の安山岩の割れ石が11個、床直上近辺に検出された。



図版6 H-4号住居跡



H-4号住居跡竈



第11図 H-4号住居跡出土遺物(1/2、1/4)



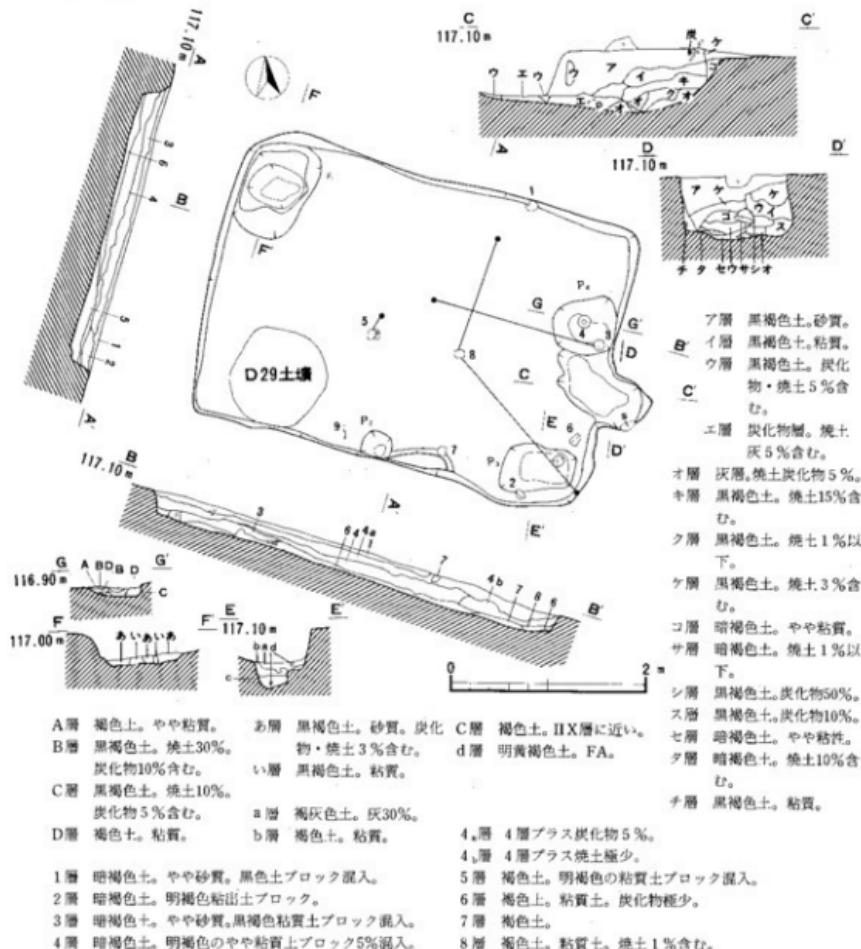
図版7 H-4号住居跡出土遺物

#### H-5号住居跡

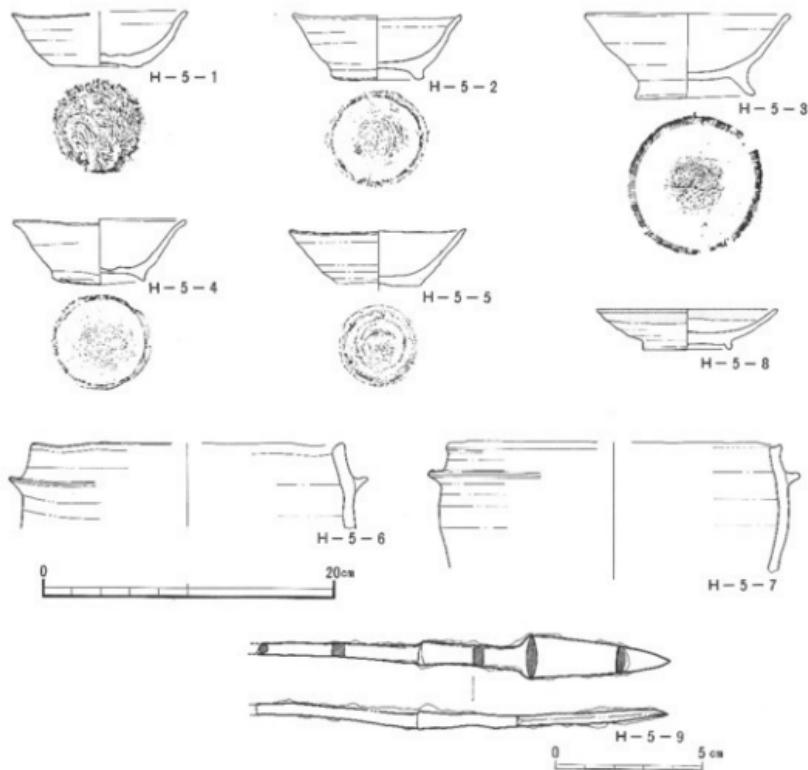
本住居跡は、遺跡の北西部、A2・B2・B3グリットに位置し、北東にH-4号住居跡を臨み、南東でH-6号住居跡に近接(距離1m)する。住居の確認面は、V<sub>b</sub>層であるが、V<sub>b</sub>層は、河原砂様であるため住居壁がはっきりつかめるのは、他の住居跡同様VI層上面となる。主軸方向は、N-60.5°-W。規模は、長軸4.2m、短軸2.94m、面積は12.56m<sup>2</sup>の長方形である。但し南壁東寄りの貯蔵穴部分は、いくらかの張り出しを見せている。長軸が東西方向にあること、竈が短壁にあることに、本遺跡の他の住居跡との違いがある。D29土壤が上に載った状態で重複している。住居内は、大掘みに見れば4層の堆積が見られる。V層に近い砂質の堆積が見られるのは、上層1層である。第2、第3層は、含有粒子のわずかな違いであって、基本的な差はない。第4層は、VI・VII・VIII層に近い粘質土である。西壁は70度、他3壁は80度以内の傾斜で立ち上がり、壁高は、18~29cmである。床はVII層以下の粘性のある褐色土にFAが10%含まれる層を切り込んで形成され、基本的には、竈のある東側が低く西側が高まり、その差は最大で8cmである。貯蔵穴、もしくはそれに類するものと見られるピットは、3個あり、第2図中のP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>がそれぞれにあたる。P<sub>1</sub>は、東北隅に位置し、住居壁から連続した落ち込みとなり、長径1m、短径65cm、深さ22cmの楕円で、掘り鉢型の底を持ち、埋土からは、炭化物・焼土が少量検出された。P<sub>3</sub>は、竈右袖にあたる住居の南東隅に位置し、住居の壁から10cm前後の間隔を持って、長辺75cm、短辺50cm、深さ15cmの不整長方形で、埋土からは、焼土・炭化物・灰が40%検出された。P<sub>4</sub>は、竈左袖にあたる住居の南東隅に位置し、住居の壁から10cm前後の間隔を持って、長辺75cm、短辺50cm、深さ15cmの不整長方形で、埋土からは、焼土・炭化物・灰が40%検出された。

る東壁直下に位置し、直径60cm前後の不整円形で、深さ10cm前後の浅い凹みの内部からは、完形塊1個と数片の遺物が検出された。竈は、東壁中央やや南寄りを切って構築され、軸線方向はN-70°-W。掘り方で、煙道方向90cm、両袖方向60cm、深さ28cmを測る。なお構築材として奥壁右側に扁平な転石が残存していた。

出土遺物は、97片を数え、住居中央部および竈寄りの貯蔵穴周辺に比較的多い散布が見られた。土師器は全く検出されず、羽釜は、鉢を含めた口縁部の断片4個体分、灰陶器は、皿5個体分の一部が検出された。鉄製品として、鏟の出土が特筆される。



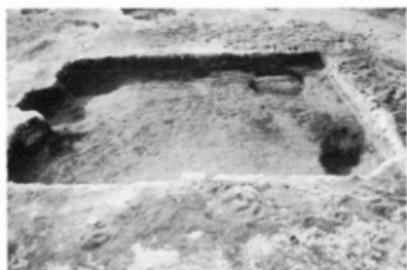
第12図 H-5号住居跡(1/60)



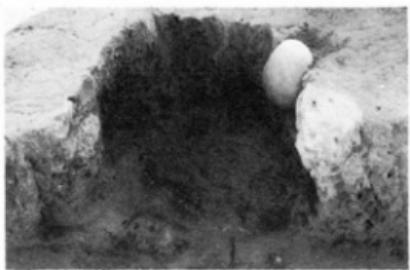
第13図 H-5号住居跡出土遺物(1/2、1/4)



図版8 H-5号住居跡出土遺物



図版9 H-5号住居跡



H-5号住居跡竪穴

#### H-6号住居跡

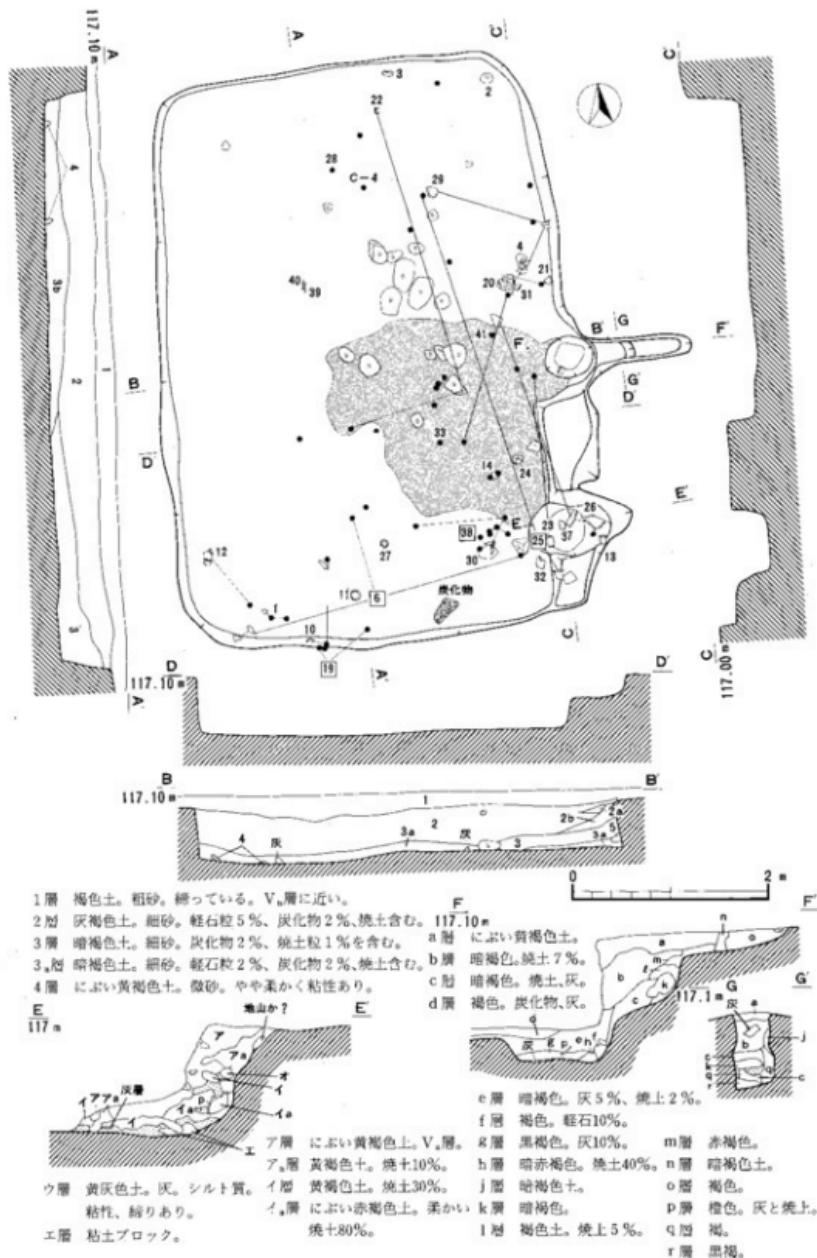
本住居跡は、遺跡中央部より、やや北西にあたり、B3・C3・D3・B4・B5・B6グリットに位置し、北にH-4号住居跡、南にH-1号住居跡を臨み、北西にはH-5号住居跡が近接する。住居の確認面はV<sub>b</sub>層であるが、V<sub>b</sub>層は、河原砂様であるため、住居壁がはっきりつかめるのは、他の住居跡同様VI層上面となる。主軸方向は、N-85.5°-E。規模は、長軸5.92m、短軸4.3m、面積23.29m<sup>2</sup>で、本遺跡の住居跡全ての中で、最大である。形態は、北辺より、南辺の方がわずかに長い長方形である。住居内は、床面まで大掘みに見ると、2層の堆積であるが、住居検出作業段階でV<sub>b</sub>の途中でわずかな土の色の違いと遺物散布の多さから住居跡の存在が確認されたので、壁として捕えることのできない上層の1層を加えた。その1層は、V層類似であり、粒子の大きさから見ればV<sub>b</sub>に近い様相を示す。住居壁内第1層はシルト質に近い細砂で、これはV<sub>a</sub>類似であり、軽石粒が5%含まれる。第2層は、第1層よりさらに粒子が小さく、軽石は2%となる。この層は東壁に近い部分で焼土粒が増える傾向にある。特に第14図東西地断中の東端の2<sub>a</sub>層は、2層に焼土粒が30%、2<sub>b</sub>層は50%含まれる。壁高は、VI層上面から最高64cm、最低45cmを測り、最低でも本遺跡の住居跡全ての中で、最深である。壁の立ち上がりは、南壁で75度、他の壁は83度内外の傾斜を持つ。床面は、VII層を過ぎ、FAを多く含む層（全体層序のIX・X・XI層に相当）を切り込み、貼り床を施して形成している。住居中央部から東南方向竪前まで、東西2.5m、南北2m程の範囲に特に堅い面があり、西南部より5cm前後高い。堅い部分を含め床面全体に薄い炭化物層が断片的に検出された。貼り床は、落ち込んで厚くなる部分もあるが、概ね10~5cmで、住居中央部から南半分が厚く北半分が薄い。粘性のある緻密な黒褐色部分とFAを主体とする黄褐色土が不均一に、堅く縮った貼り床を構成していた。床下土坑は4、床下ピットは顕著なもの（深さ10cm以上）5で、比較的浅い土坑1、土坑2を除いて、住居中央より南半分に集中している（第15図）。貯蔵穴は、貼り床下から検出された。位置は南竪右袖部分で南壁寄りである。規模は、南北66cm、東西45cmのやや不整な長方形で、底は三段の段差があり、深さは南が最も低く確認面から最深20cmを測る。

本住居で最も特徴のある施設は棚状の造構で、住居の東壁と南壁から地面を切り込んで、南竪

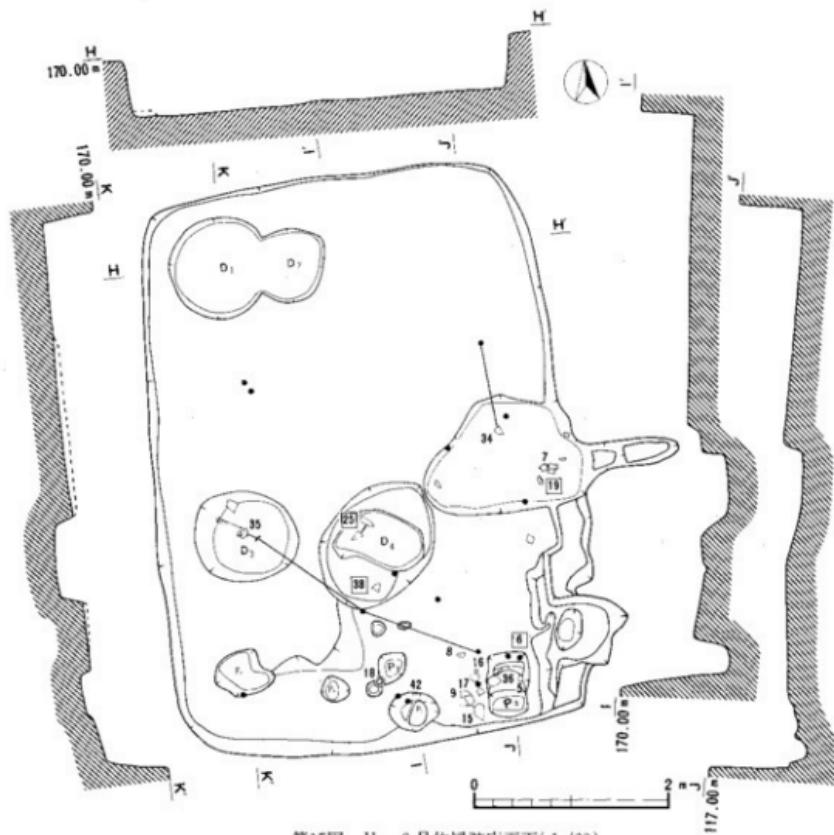
の袖を形成し、北竈の右袖の位置まで達している。上面はVII層を切って形成され、住居壁VI層上面からの深さは、住居南東角で15cm、南竈右袖部で21cm、左袖部で10cm、北竈右袖部で12cmを測る。上面の形は、南竈を挟んで、概ね長方形を縦に二つ並べた形であり、竈南は、南北50cm、東西34cm、竈北は、同じく90cm、49cmを測る。床面からの高さは、竈南が35cm前後、竈北が30cm前後であるが、上面は二つ同じ様な高さであり、平らに近い面を形成している。床からの立ち上がりは、竈南住居内側は83度、竈北住居内側は77度、北竈側は70度の傾斜が見られる。この櫛状遺構の地断を見れば、南竈南では、VII・VIII・IX層の整然とした堆積が見られる。北ではVII層の下に、13cm内外の厚さで、焼土ブロック、炭化物、多量の灰、土器破片を含む層が見られ、その下から再び自然堆積の様相を見せる。東西地盤で見ると、土器片を含む層は、10cm内外の奥行きで終っている。袋状の櫛の可能性も考えられる。

竈は、最初南竈だけが検出された。住居の東壁は煙道部分のみが切り込み、櫛状遺構が袖を形成していて全体によく焼けていた。軸線方向は、N-83.5°-E。堀り方で煙道方向103cm、両袖方向68cm、深さ54cmを測る。北竈は、住居東側中央部よりわずか南に位置し、煙道部が壁を切って長く壁穴外に延びている。袖部分は全く残存せず、櫛状遺構も全く焼けていない。軸線方向は、N-85.5°-E。堀り方で煙道方向1.5m(煙道部分 1m)、深さは67.5mを測る。なお、北竈は、床下で底の平坦な土壤状の堀り方を持つ。二つの竈を比較すれば、南竈は、残存状態がよく、袖部分も燃焼部もよく焼けて、赤橙色を呈し、火床部の位置が高く、床面の高さに合うので本住居の廃棄直前まで使用されたと考えられ、北竈は、床面が低い状態で使用され、本住居で人々の生活が営まれている途中で廃棄されたと考えられる。

出土遺物は、923片を数え、その中で、床下及び北カマド内から出土した遺物は、247片である。出土状態は、床上では、南竈内からその周辺に特に密で、住居内北西部を除いて全体的散布が見られた。床下では、貯蔵穴内、各床下土坑内及び北竈前堀り方内に集中して検出された。土師器は、床下で壺2個分、床上で小型壺1個体の部分が検出され、羽釜は、鍔を含めた口縁部の数で、床上で14個体分、床下1個体分及び床下と床上で接合するもの1個体分のそれぞれ1部が検出された。灰釉陶器は、長頸壺4個体分、塊27個体分、皿22個体分の1部が検出されたが、塊・皿、合わせ、床下からの出土は5個体分の細片であった。鉄製品は、釘が4本出土したが、床下からは1本(第18図中42)であった。その他腕状鉄滓が床下から2塊、床上から2塊出土している。塊高台部を転用したと思われる紡錘車2個は、南壁、北壁のそれぞれ中央部から住居内へ、1m程の距離で、床面密着と床面から4cm上がった位置から出土している。また、床に密着した状態で、大小合わせて20個程の石が検出された。住居中央部から、北東部にかけ分布し、大きさは拳大から、長径35cm短径20cm厚さ20cm程までの割れ石と円礫である。なお本住居から検出された遺物の中で、床上の遺物と床下(主として土坑)の遺物が接合するもの、他の住居及び土壤から検出された遺物と接合するものが数個見受けられた。(第1表参照)

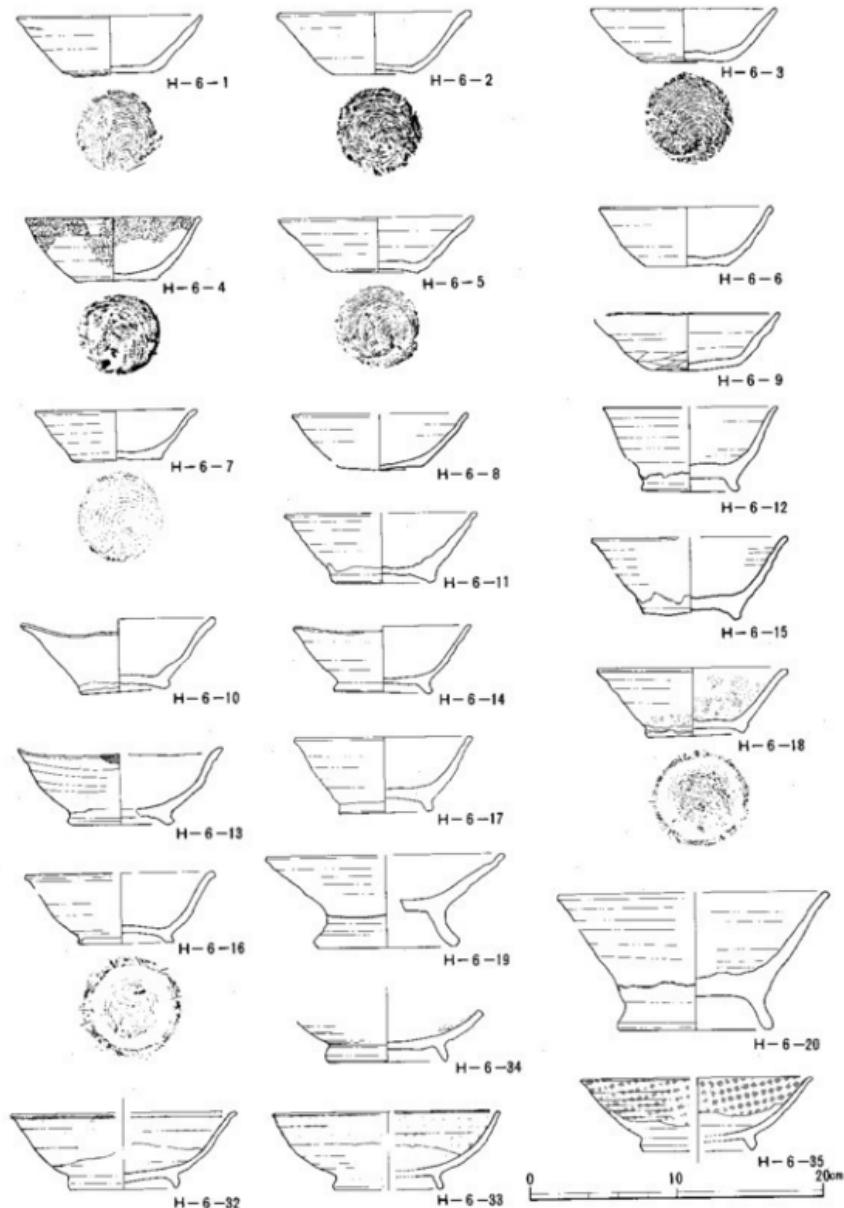


第14図 H-6号住居跡(1/60)

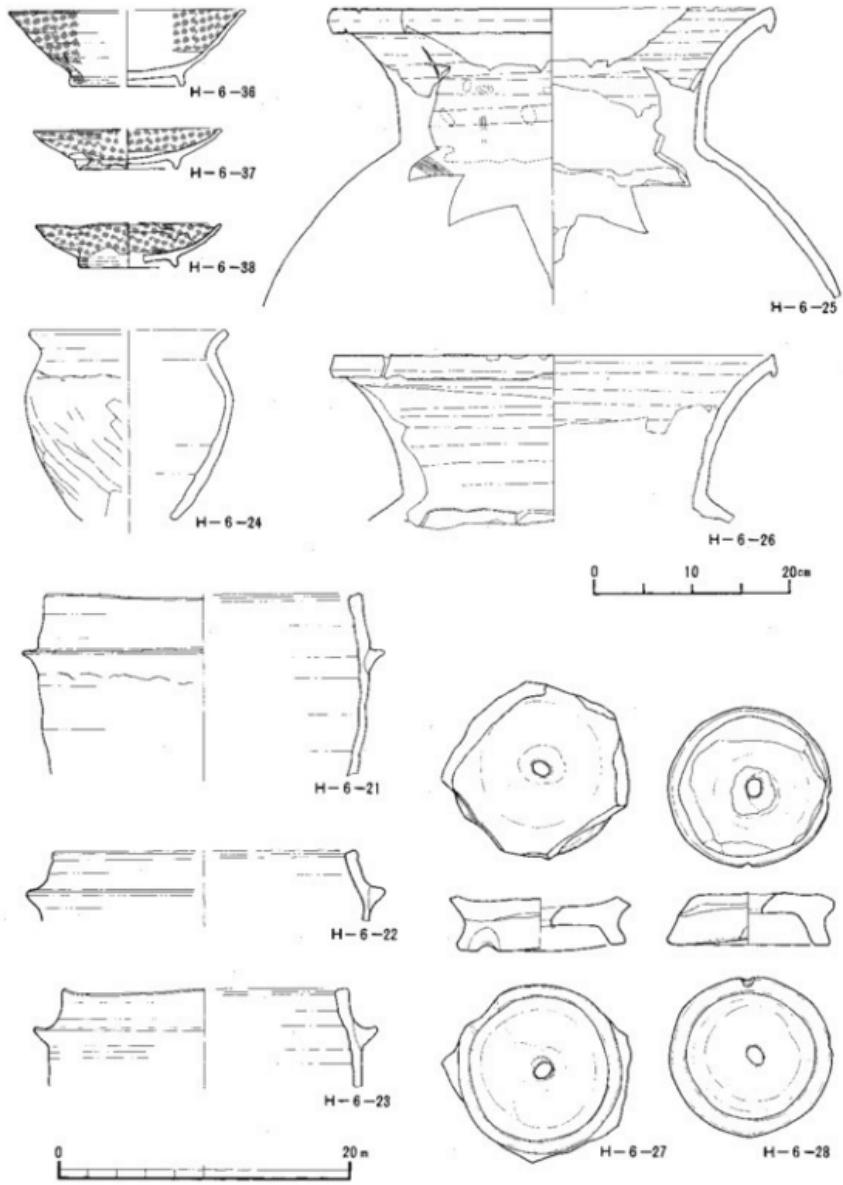


第15図 H-6号住居跨床面下(1/60)

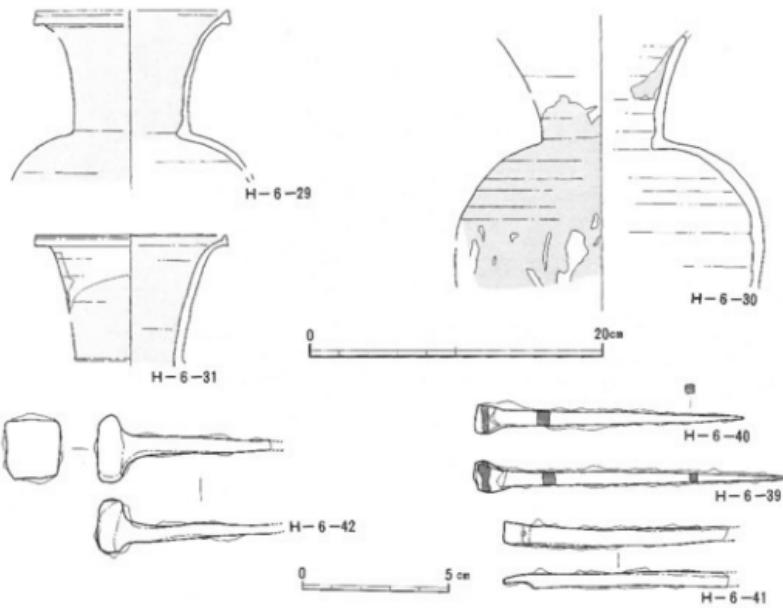
遺物番号	器種	登録番号(標高マイナス110m)	○床下	△H-6号住居外
6	坏	335(6.48)、427(6.56)、662(6.41)、○床下184(6.21—貯藏穴内)		
25	犬 頭	269(6.77)、359(6.49)、○床下156(6.15—D4)、○床下157(6.19—D4)、△H-4号住居197(6.9—壇上部)		
31	長脛瓶	348(6.42)、△H-4号住居45(7.01—床上23cm)		
32	塊	431(6.42)、△H-8号住居348(6.61—床上1cm)		
38	灰 軸	417(6.52)、418(6.58)、420(6.56)、○床下141(6.36—D4上部)		
	羽釜底	202(6.63)、○床下123(6.36—壇直下)、○床下133(6.28—北壇前土壤)、○北壇8(6.36—火床部)		
	須 恵	54(6.04)、55(6.03)、177(6.63)、254(6.92)、422(6.53)、○床下190(6.31—貯藏穴内)		
	大 頭	△C5グリット1(6.08—南壇から東3.5m)、△C4グリット11(6.16—北壇直上)		
	灰軸塊	83(7.05)、174(6.89)、243(6.69)、522(6.61)、△H-4号住居114(6.86—壇軸上)		



第16図 H-6号住居跡出土遺物(1/4)



第17図 H-6号住居跡出土物(1/2、1/4、1/6)



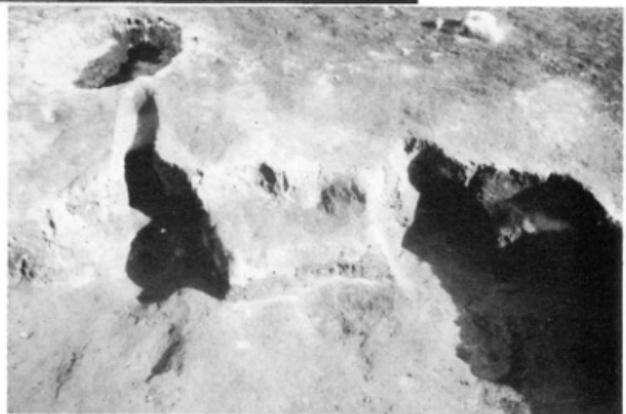
第18図 H-6号住居跡出土遺物(1/4、1/2)



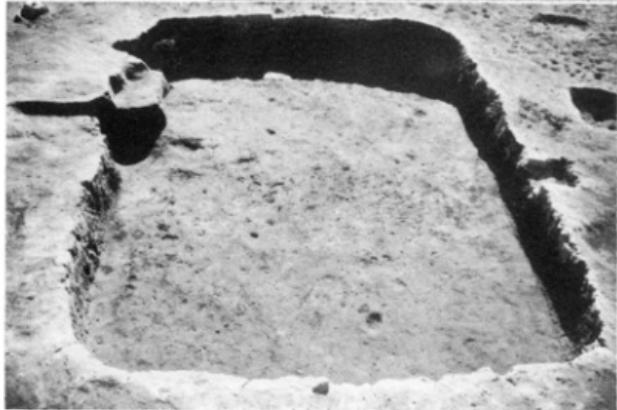
図版10 H-6号住居跡床面下



H—6号住居窯内遺物  
出土状況

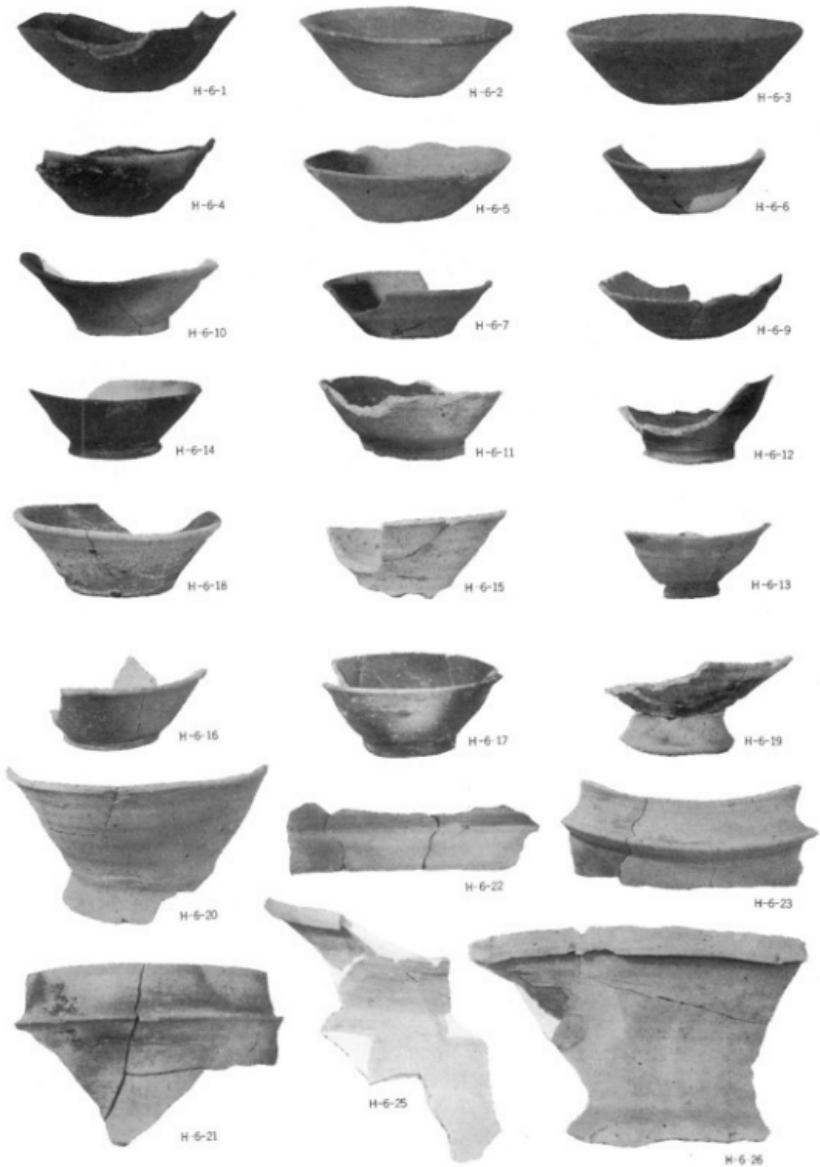


H—6号住居北・南窯と  
棚状遺構

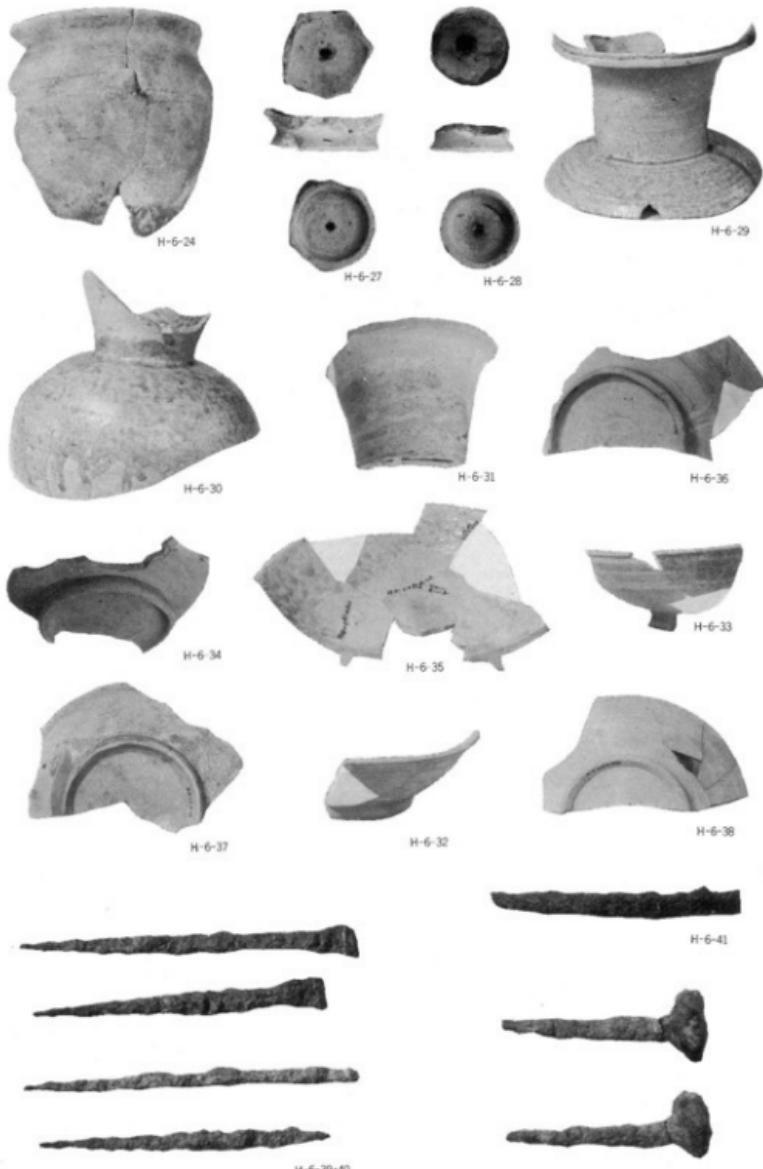


H—6号住居跡

図版11

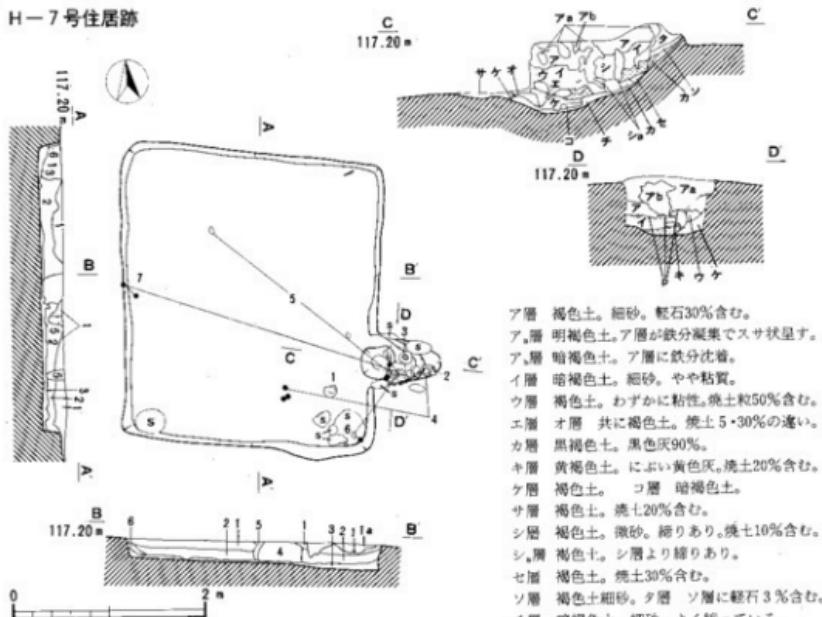


図版12 H-6号住居跡遺物



图版13 H-6号住居跡遺物

H-7号住居跡



ア層 褐色土。細砂。軽石30%含む。  
 ア<sub>a</sub>層 明褐色土。ア層が鉄分凝聚でスサ状呈す。  
 ア<sub>b</sub>層 暗褐色土。ア層に鉄分沈着。  
 イ層 暗褐色土。細砂。やや粘質。  
 ウ層 褐色土。わずかに粘性。飛土粒50%含む。  
 エ層 オ層 共に褐色土。焼土5・30%の違い。  
 カ層 黒褐色土。黒色灰90%。  
 キ層 黄褐色土。にぶい黄色灰。焼土20%含む。  
 ケ層 褐色土。コ層 暗褐色土。  
 サ層 褐色土。焼土20%含む。  
 シ層 褐色土。微砂。繊りあり。焼土10%含む。  
 ジ層 湿褐色土。シ層より締りあり。  
 ツ層 褐色土。焼土30%含む。  
 ヲ層 褐色土細砂。タ層 ソ層に輕石3%含む。  
 チ層 暗褐色土。細砂。よく締っている。

1層 暗褐色土。細砂。繊りあり。1<sub>a</sub>層 1層に鉄分凝聚。

2層 暗褐色土。細砂。繊りあり。軽石粒10%含む。

3層 黑褐色土。にぶい黄褐色土ブロックとの混土。粘性、繊り共にあり。5層 褐色土。4層類似で軽石粒2%含む。

4層 褐色土。わずかに粘性あり。軽石粒5%。

6層 褐色土。わずかに粘性あり。軽石粒2%。

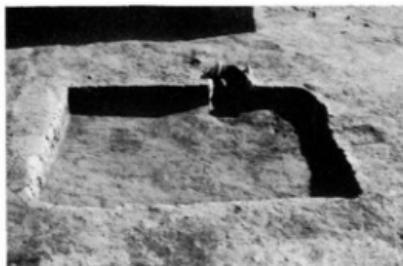
第19図 H-7号住居跡(1/60)

本住居跡は、遺跡の北東部のZ 6・A 6・A 7グリットに位置し、7.5m西にH-6号住居跡を臨む。住居確認面は、V<sub>b</sub>層であるが、住居の壁としてははっきり埋めるのは、VI層上面となる。主軸方向は、N-81.5°-W。規模は、長軸3m、短軸2.6m、面積8.12m<sup>2</sup>のきわめて正方形に近い長方形を呈する。住居が埋没して後小河川の底となつたと見られ、鉄分沈着が電部分から、北東部にかけて著しい。住居内は、概ね3層の堆積が見られるが、上2層はV<sub>b</sub>に近い砂質の堆積であり床面直上の薄い3層のみ粘性と繊りを持つ。住居壁は4方とも80度前後の傾斜で立ち上がり壁高は、20cm~27cmを測る。床はVII層をわずかに切って形成され、床面は、ほぼ平らである。

竈は、東側南寄りの壁を切り、火床部もほとんど住居外になる状態で扁平な河原石を袖部、燃焼部に使用して構築されている。竈の軸線方向はN-89.5°-E。掘り方で煙道方向90cm両軸方向60cmを測る。火床部、煙道部共によく焼けている。支脚として長軸26cmでほとんど円（径14cm前後）に近い断面を持った河原石を使用している。

出土遺物は、81片を数え、その内36片が竈内から集中して検出された。土師器は壺4個体、坏1個体のそれぞれ1部が検出されたが、遺物全体に占める上師器の割合は、他の住居と比べ多い

傾向である。羽釜と考えられる土器の出土は、可能性のあるもの1片のみである。灰釉陶器は釉の流下と貫入の著しい壺（第20図7）と塊の高台の一部で腰部ヘラ削り調整三日月高台、刷毛がけの透明釉、胎土は長石微粒を含むやゝ粗な褐灰色を呈す1片である。また本住居でも、紡錘車の一部と思われる棒状に鍛のかたまりの付着した鉄製品が検出された。なお住居の南東と南西角に扁平な河原石が南東で床直上、南西で14cm上部で検出されている。



図版14 H-7号住居跡



H-7号住居跡窓内遺物出土状況



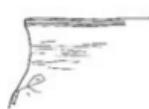
H-7-3



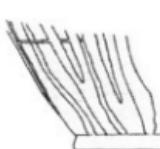
H-7-1



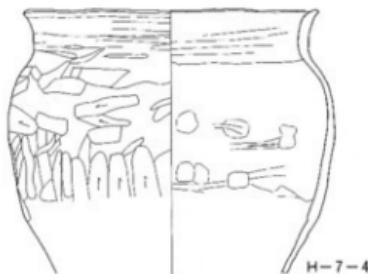
H-7-2



H-7-5



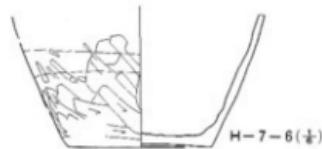
H-7-7



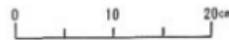
H-7-4

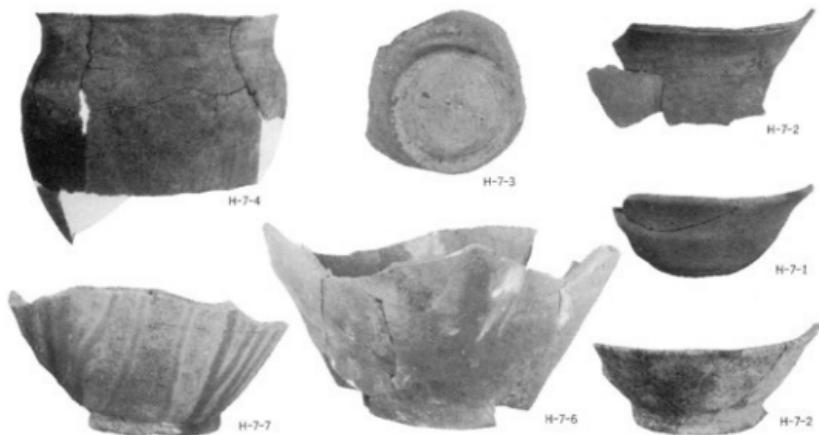


第20図 H-7号住居跡出土遺物(1/4、1/6)



H-7-6(1/6)





図版15 H-7号住居跡遺物

#### H-8号住居跡

本住居跡は、遺跡の中央部や、南東寄りのE7・F7・E8・F8グリットに位置し、東にH-10・11号住居跡を臨み、H-12号住居跡、D54土壙D55土壙を切っている。住居確認面はVI層であるが、V<sub>b</sub>層中から遺物の散布が見られた。主軸方向は、N-83.5°-E。規模は、長軸4.51m、短軸3.56m、面積17.56m<sup>2</sup>である。形態は、長方形を呈する。住居内は、北東で3層、南西で2層の堆積であるが、H-12号住居跡との重複関係もあり、住居の南西部を住居跡検出過程で確認できずにVII層に達してしまった。堆積の様相は、部分的に異なり、南東部では、上2層がV<sub>a</sub>層に近い砂質であり、下層は、やや粒子が細かくなり、粘性を帯びる。北東部は、南東の下層部分が、住居の深さの3分の2近く埋めていて、V<sub>a</sub>、V<sub>b</sub>的砂質は少ない。壁高はよく残っている部分で32cmを測る。壁の傾斜は、北壁で64度、南壁で80度、東壁は、ほとんど直立である。竈は、住居東側、南寄りの壁を切り、扁平な河原石を使用して構築されている。軸線方向は、N-87°-E、掘り

#### H-8号住居跡竈▶



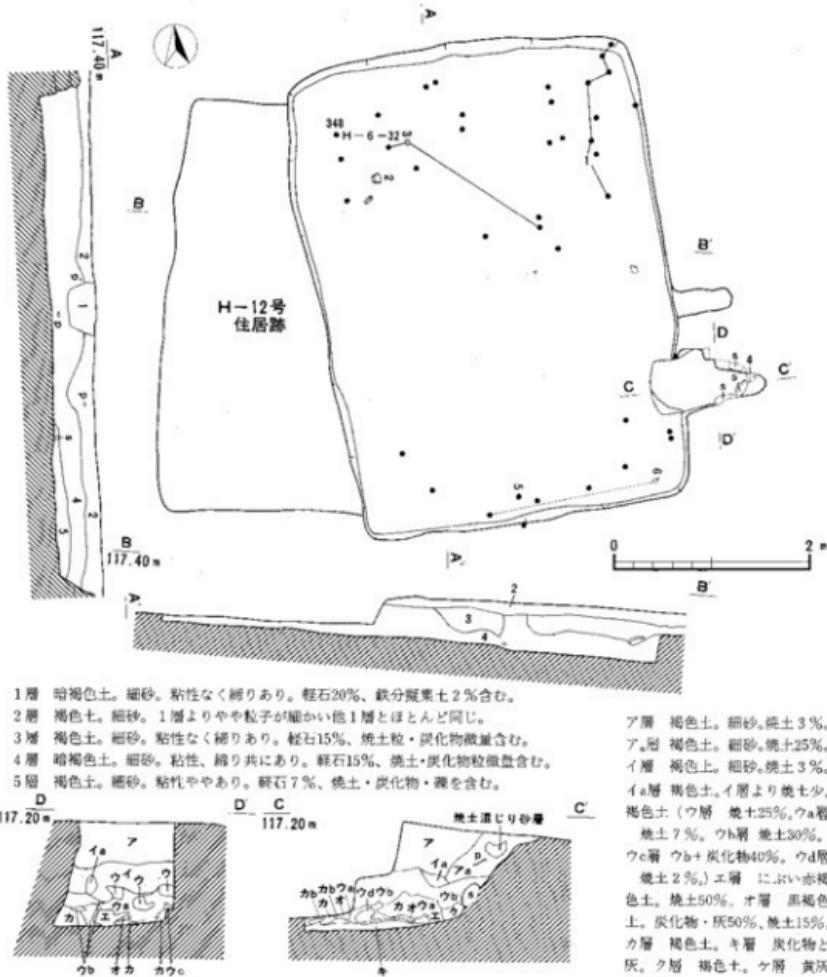
図版16 H-8号住居跡



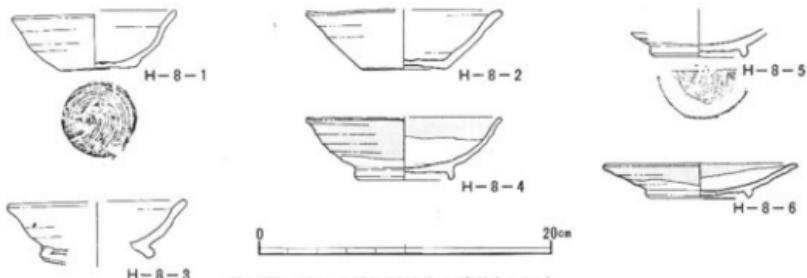
方で煙道方向126cmで住居内部分に火床がかかり両袖方向は60cmを測る。全体的によく焼けていて支脚を持つ。

出土遺物は361片を数え、住居全面に割合平均した分布状態であった。検出された遺物片の数は

多いが小片で、実測に耐えられるものは少ない。この中で土器は、壺3個体のそれぞれ一部、坏1個体の一部が検出された。羽釜は、鍔を含めた口縁部の数で6個体分あり、この中の1個は鍔下部が極端な「く」の字形に、外側に開く形をしている。灰釉陶器は、壺1個体分、坏・壺10数個体分のそれぞれ一部が検出されたが、これはH-6号住居跡の灰釉陶器の数に次ぐ多さである。なお、本住居跡で検出された灰釉陶器1片が、H-6号住居跡出土の壺(H-6-32)と接合する。



第21図 H-8号住居跡(1/60)



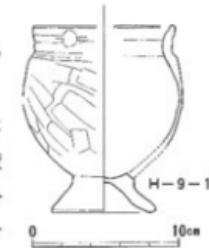
第22図 H-8号住居跡出土遺物(1/4)



図版17 H-8号住居跡遺物

#### H-9号住居跡

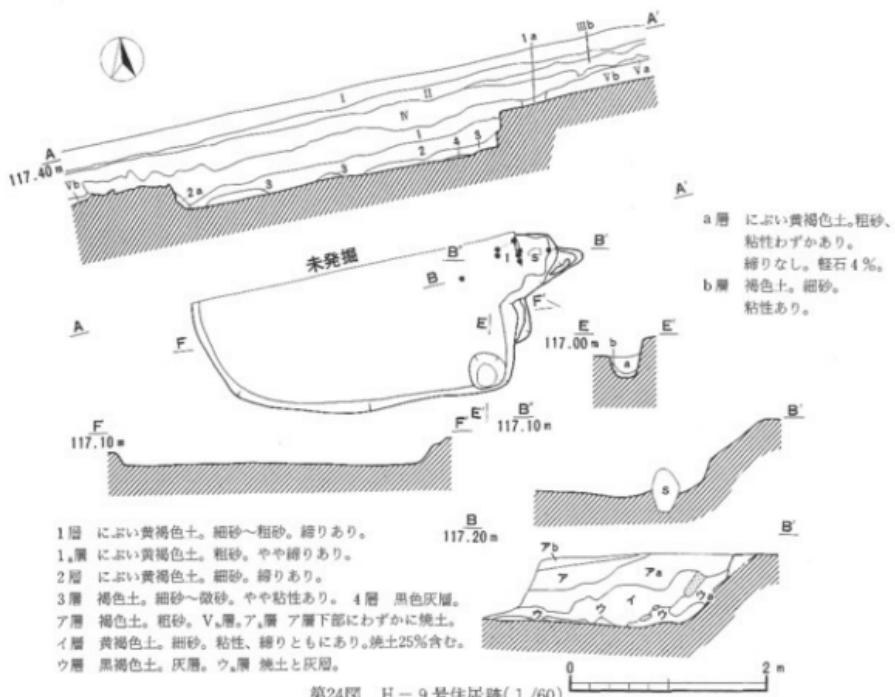
本住居跡は、遺跡の北側調査区域内に入った部分のみ調査したものであり、住居跡全体の1部に過ぎない。Z3・Z4グリットに位置している。H-4号住居跡と南東隅で50cmの距離を持って接している。住居確認面はV<sub>b</sub>層である。主軸方向はおよそN-89.5°-E。規模は不明であるが、南壁で、およそ3mを測る。南西隅は隅円と見られる。住居内は大きく3層に分かれ、上2層(住居の床面に着いている部分もある。)は、V<sub>b</sub>層とほとんど変わらない。なお本住居は、調査範囲の地断にかかっているので、壁としては、かなりあいまいになるがV<sub>b</sub>層から住居が造られている様子が見られる。南東の角には、南・東壁から直接落ち込む、直径37cm前後、床からの深さ22cmのピットがある。竈は、東側で南壁から80cm程の位置に壁を切って構築されている。軸線方向は、N-37.5°-E。煙道方向は1mを測る。竈前は袖から住居内へ径40cm程の範囲まで厚さ10~20cmの貼り床が施されていた。出土遺物19片中9片は竈内の出土。須恵器大甕破片2片、塊1片、羽釜と考えられる破片4片以外は、土師器小型甕(H-9-1)と甕の断片である。なお、竈内には支脚石があり、右袖わきに段状の遺構がある



第23図 H-9号出土



図版8 H-9号出土



第24図 H-9号住居跡(1/60)



図版19 H-9号住居跡

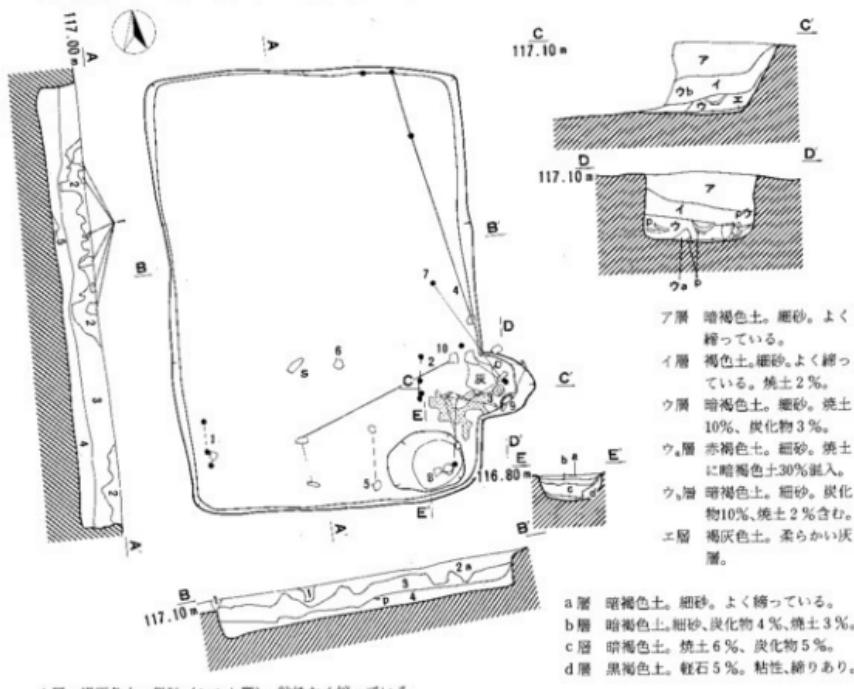
H-9号住居跡窓

#### H-10号住居跡

本住居跡は、遺跡の東側やや南寄り、E 9・F 9・E 10・F 10グリットに位置し、南東30cmでH-11号住居跡に隣接し、ほぼ真西5mにH-8・12号住居跡を臨む。住居確認面はV<sub>b</sub>層であるが、壁として掘えるため、VI層上面まで掘り下げて調査を進めた。主軸方向は、N-88.5°-W。

規模は、長軸4.47m、短軸3.10m、面積は、14.02m<sup>2</sup>を測り、形態は長方形である。住居が埋没して後、小河川が上面全面を流れ、そのための鉄分沈着が著しい。住居内は大きく見れば2層の堆積であり、上層は、河川による鉄分沈着の状態によって、3つの部分に分かれる。しかし基本的には、どの層もV<sub>n</sub>層を基本とした砂層である。北壁と南壁は、垂直に近い86度内外の傾斜で立ち上がり東西壁は、77度内外の傾斜で立ち上がる。V<sub>n</sub>層の部分を加えると40cm程の壁高となる。床面は、V<sub>n</sub>層をわずか切って形成され、竈前から住居中央部にかけて堅緻な面が見られる。全体的に見ると、住居中央から北側より2~7cm程高い。貯蔵穴は、竈右袖わきの住居南東の角に位置し、長径82cm、短径62cmの東西に長軸を持つ橢円形を呈す。深さは22cm前後で、底は円形で平坦である。竈は、東側南寄りの壁を切って構築されている。掘り方で煙道方向1.05m、両袖方向62cm、深さ41cmを測る。全体的によく焼けた状態が見られる。

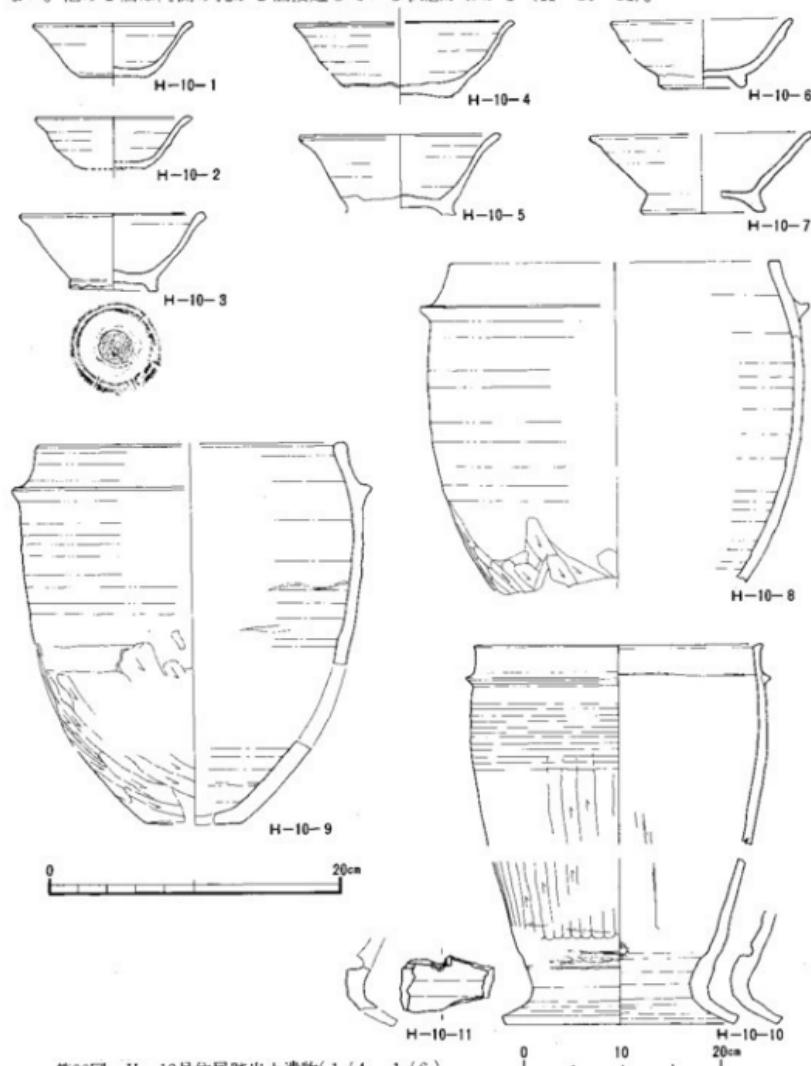
出土遺物は、183片を数え、その内44片は竈内およびその周辺から出土している。土器器は検出



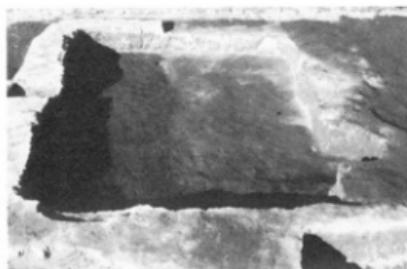
- 1層 暗褐色土。微砂（シルト質）。粘性なく締っている。
- 2層 明赤褐色土。粗砂に近い細砂。灰褐色土に鉄分が沈着。1層際は特に硬く凝縮。
- 2.5層 明褐色土。細砂。2層より鉄分沈着が少ない。
- 3層 灰黄褐色土。細砂。粘性なく締っている。軽石 5%含む。
- 4層 に近い黄褐色土。微砂。粘性、締りともにややあり。軽石 2%含む。
- 5層 黒褐色土。4層と灰の混じった土。比較的柔らかく粘性ややあり。

第25図 H-10号住居跡(1/60)

されず、羽釜は、鉢を含めた口縁部で10個体分が検出された。灰釉陶器は、小破片のみ10片の出土で、焼口縁部1片には、全面に煤の付着が見られる。また鉄滓3塊は、東・南壁際で壁上面に近いレベルからの出土である。なお羽釜状壺と見られる遺物は2個体分検出された。H-10-10は羽釜状の口縁部と壺状の底部が胎土・整形技法・調整痕等では同一個体と考えられるが接合しない。他の1個は内側の孔が2個接近している状態がわかる（H-10-11）。



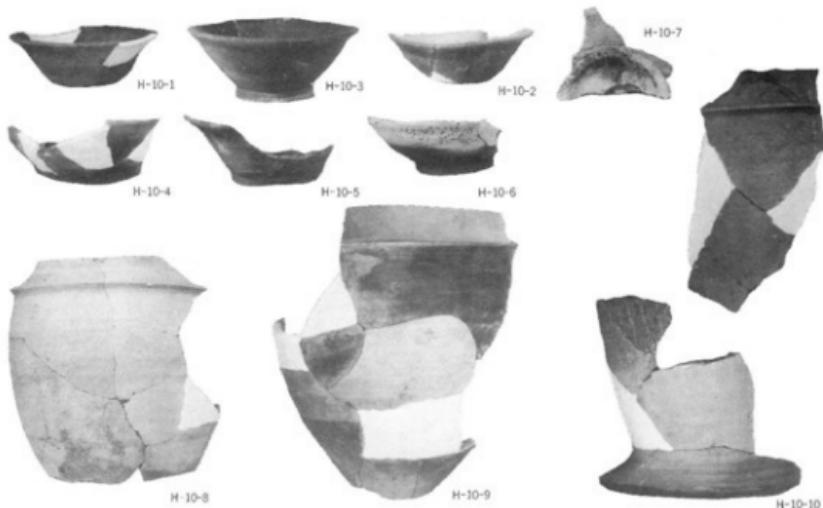
第26図 H-10号住居跡出土遺物(1/4、1/6)



図版20 H-10号住居跡



H-10号住居跡竈内遺物出土状況



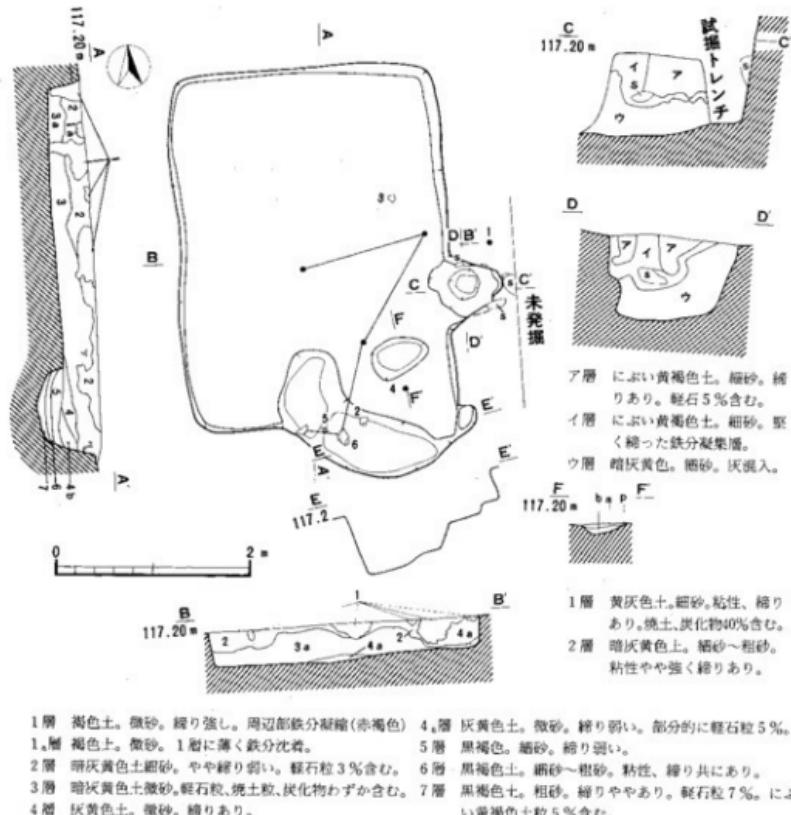
図版21 H-10号住居跡出土遺物

#### H-11号住居跡

本住居跡は、遺跡の東際、南寄り、F10・G10・F11・G11グリットに位置し、竈煙道部は調査範囲外となっている。北西30cmでH-10号住居跡に隣接し、西方やや北寄りにH-8・12号住居を臨む。住居確認面はV<sub>a</sub>層であるが、壁として掘えるため、VI層上面まで掘り下げて調査を進めた。主軸方向は、N-88.5°-E。規模は、長軸4m、短軸2.72m、面積は11.13m<sup>2</sup>を測り、形態は、基本的には、長方形であるが、南壁東寄りが半円形に張り出している。住居が埋没して後、竈部分を含む住居の北東部上面に小河川が流れ、かなり著しい鉄分沈着が見られる。住居内は、大きく見れば2層の堆積があり、上層は、鉄分沈着の状態によって二層に分かれる。しかし基本的にはどの層もV<sub>a</sub>層を主とした砂層である。北東角に近い壁は76度内外の傾斜で立ち上がり、南

西角に近い壁は86度内外の傾斜で立ち上がる。壁高はV<sub>b</sub>層を含めて最高41cm、最低で34cmを測る。床面は、VII層を切って形成され、南張出し部分を除き平坦に近い。南張出し部分は、床面から深さ30cm前後の東側の部分と、17cm前後の西側部分の段状の底を持つ土坑状を呈する。竈右袖部前には、長径60cm、短径35cm、深さ10cmの貯蔵穴と思われる楕円形のピットが検出された。窓は、東側でやや南壁寄りの壁を切って構築され、燃焼部、煙道部には扁平な河原石を使用している。なお、火床部も住居外にある。軸線方向は、N-87.5°-E、煙道方向は現状で90cm、両袖方向は70cm、深さは49cmを測る。全体に比較的よく焼けている。

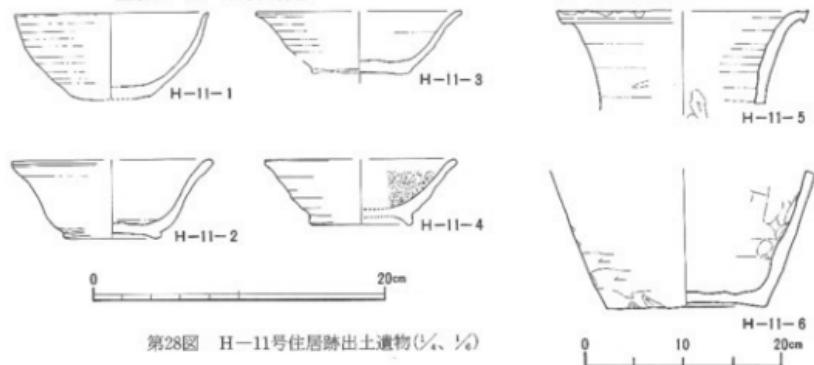
出土遺物は、62片を数え、大半は竈内とその周辺、および張出し部の比較的高い部分から検出された。土師器は壺1個体分の一部、灰釉陶器は塊口縁部1片が検出された。なお、この住居跡からは、須恵器壺の破片の出土が多い（4個体前後の破片と思われる）。



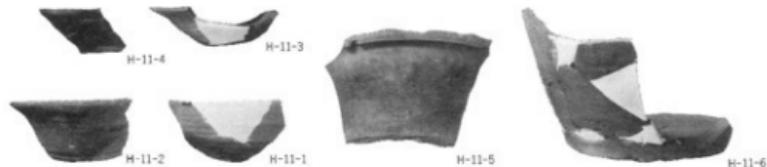
第27図 H-11号住居跡(1/60)



図版22 H-11号住居跡



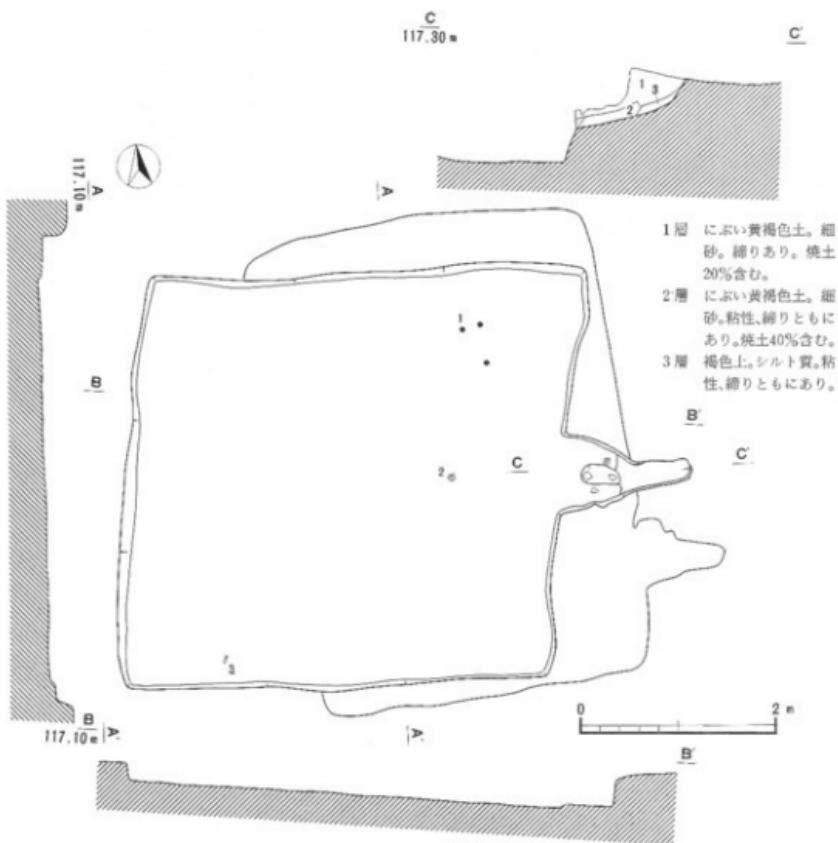
第28図 H-11号住居跡出土遺物(1/4、1/2)



図版23 H-11号住居跡出土遺物

#### H-12号住居跡

本住居跡は、遺跡の中央部やや東寄りのE7・F7・E8・F8グリットに位置し、東にH-10・11号住居跡を臨み、D54土壤、D55土壤を切り、H-8号住居に切られている。住居確認面はVI層であるが、V<sub>a</sub>層をベースとする覆土中での切合関係は判然とせず、VII層中での床の高さの違いが検出された段階で本住居跡の範囲が確認された。主軸方向は、N-88.5°-E。規模は、長軸4.45m、短軸4.26m、面積は19.54m<sup>2</sup>である。形態はゆがんだ正方形である。H-8号住居跡との重複から外れる竈煙道部から床面までの高さは、47cmを測る。床面は、H-8号住居跡の床面より3cm前後低い。竈は、住居東側の中央部の壁が切り込んで構築され、煙道部はよく焼けて残存状



第29図 H-12号住居跡 (縦断面)



図版24 H-12号住居跡



H-12号住居跡遺

態が良い。軸線方向は、N-86.5°-E。残存状態で煙道方向136cm、両袖方向80cmを測る。

出土遺物は、28個を数え、竈火床内とその周辺に集中している。明らかに土師器と考えられる破片の出土ではなく、灰釉陶器も検出されなかった。南壁やや西寄りから青銅製の太刀の締金具と考えられる遺物が検出された。



図版25 H-12号住居跡出土遺物

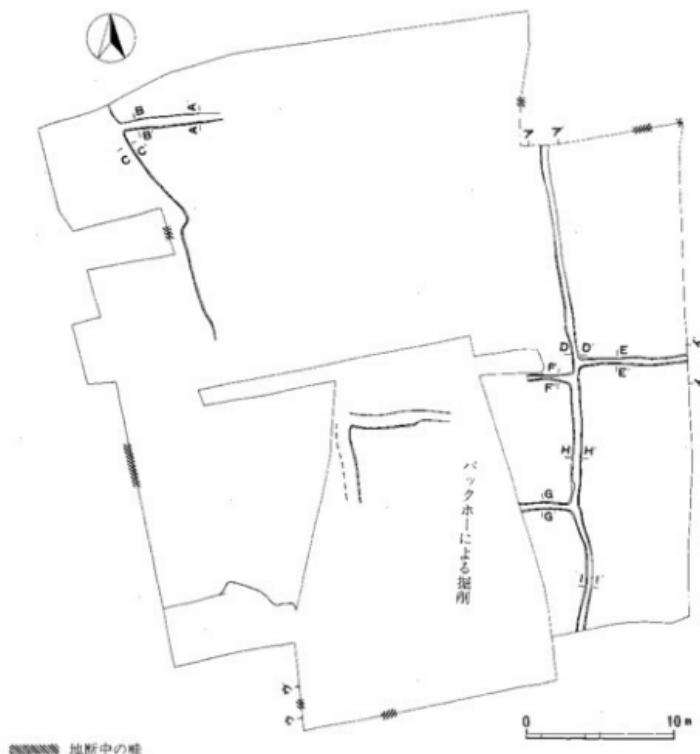
## 2 水 田 跡

V<sub>b</sub>層を重機で排除しながら住居跡を検出する作業の過程が遺跡の東側に達した段階で、V<sub>a</sub>層の河原砂の中に、粘性の強いシルト質のVI層が、幅40~50cm程で、南北に1本通り、その縫からはほぼ直角に、東に1本、西へ2本枝分かれしている様子が検出できた。注意深く見れば、遺跡の北西部から西側中央部まで、V<sub>b</sub>層とVI層が分かれている様子を窺うこともできる。また調査の最初の段階で、F 5・G 5・F 6グリットにおいて、L字状のVI層の存在があったことも合わせると、この青柳居寄遺跡では、北西部の東西5m、南北20mの部分を残して、全面に水田跡の存在が考えられる。その水田は、VI層で畦と水田の底部が形成され、河原砂様のサラサラしたV<sub>b</sub>層で埋まった状態が、部分的に検出された。

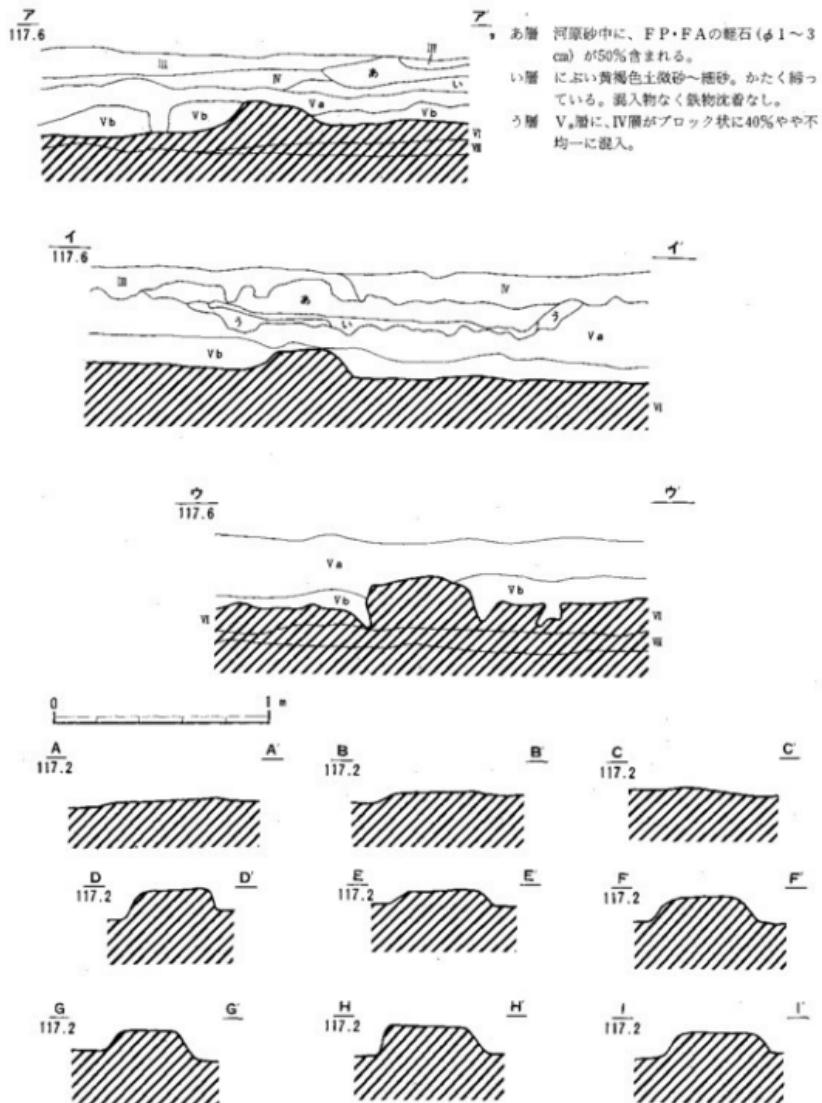
検出した畦構造は、遺跡の東側で、グリット基線8・9・10・11ラインの間に位置し、遺跡の北限から南限および東限に達している。畦に囲まれた南東部には、H-10号・H-11号・西側では畦を切って、H-8・H-12号のそれぞれ住居跡が存在する。南限から北限に達する畦は東西畦との接合部で、いくつかの曲がりが見えるが、概ね直線距離で33mの長さで、N-9.5°-Wの向きを測る。北限から14.4mの位置で、東に延びる畦と接合し、15.5mと24.4mの2ヶ所で、西に延びる畦と接合している。水田面は、北限、南限の付近で標高117mであり、全体的に平坦である。東に延びる畦は、7.2mで遺跡の東限に達し、西に延びる畦の北側は3mでH-8号住居跡に切ら

れ、南側は3.4mで、検出境に達する。東西の畦の向きはどれもN—87°—Eである。畦の断面は、概ね下底が40~50cm、上底が30~40cmの台形を呈する。

遺跡の北西部では、VI層が落ち込み、V<sub>b</sub>層で埋まる部分は、グリット基線1・2・3ライン、A・B・Cラインの間に位置する。南北の落ち込みは、東西のそれとの交点から7.5mまでは、N—39°—Wの向きで、それより南9mは、N—15.5°—Wの向きで延びる。東西の落ち込みは、わずかに畦状の高まりを持ち、N—76.5°—Eの向きで交点から6.6mの長さで検出された。その他の水田遺構としては、遺跡を囲む地断中のVI層の高まりとして検出できた。北東部では、Z7・Y7グリットにかかる部分1ヶ所、A9・A10グリットの2ヶ所、南壁では、K6グリットで1ヶ所、西壁では、K4・G1・C2グリットの3ヶ所の計8ヶ所を数える。幅は40~50cmが4ヶ所、1mが2ヶ所、1.3m、2.5mが各1ヶ所である。



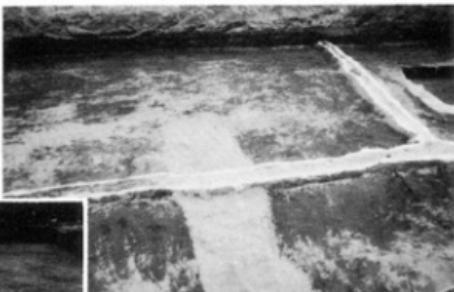
第31図 水田跡全体図(1/100)



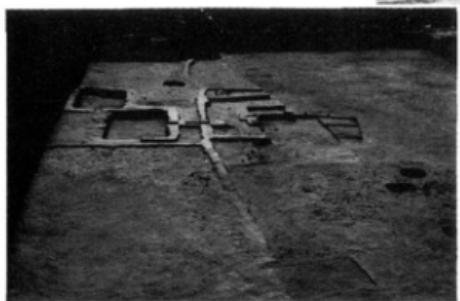
第32図 水田跡、地断およびエレベーション



南北の畦（南から）



北東区画コーナー部  
(南から)



東側全体（北から）



北西部分（北東から）

図版26 水田跡

### 3 土 壤

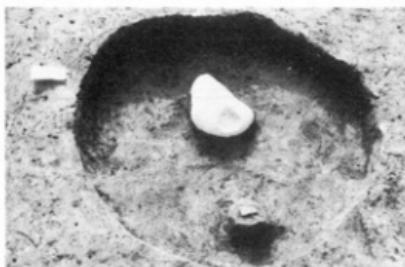
遺跡の中央部北側にかけて、合計53の土壤が検出された。東西20数メートル、南北30メートル程の範囲にほとんど集中している。形態は、円、またはそれに類するもの45、方形、またはそれに類するもの8を数える。規模は、円形のものでは、直径1.24m～0.46mで、1m前後のものが大部分である。方形のものでは、1辺1.33m～1.18m、長方形では、長辺1.52cmが最大である。深さは8cm～60cmを測る。検出面は、V<sub>a</sub>層およびV<sub>b</sub>層であるが、V<sub>a</sub>層中で検出された土壤中には明らかに浅間B軽石が多量に含まれていた。土壤を埋めている土は、前記の浅間B軽石を多量に含むものでは、下層に鉄分の沈着の微砂ブロックが多い。それ以外の土壤は、D54・D55を除き、V<sub>b</sub>層中で検出され、それらのものには、炭化物粒、焼土粒が1%～3%含まれる傾向がある。また、どの土壤も埋め土はよく締っていた。遺物は、16の土壤から出土しているが、図面になるものは、3個体に過ぎない。出土遺物の点数の多いD21では、須恵器大甕頭部破片の他は須恵器坏、焼成個体分の1部の断片であり、全体的に床より20cm前後高い位置からの出土である。D36では、24片の出土があり、灰釉壺胴部、羽釜、坏の1部の断片が検出された。またD36では、V<sub>b</sub>層の高さで焼土、炭化物(竹と考えられる。)のかなり多量の出土があった。D41の灰釉の皿もV<sub>b</sub>層中からの出土である。なおV<sub>b</sub>層中で検出された土壤は、壁の確認のため、住居と同様VI層上面まで削って調査を進めた。

第2表 土 壤 一 輯

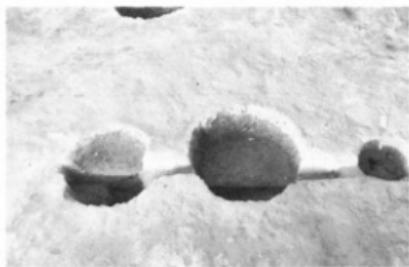
番号	遺物 立敷	所 在 グリッド	形 態	長軸 方 向	長軸・短軸 直径(cm)	深さ (cm)	層 序	(備 考)	変遷関係 引→新
D1		D 4	円		124	8.5	1層 單褐色粗砂。(B軽石多い。)(底部に小さな凹み痕)		
D2		F 5	円		91	16	1# # ( # )		
D3		E 5	円		63	25	1# # ( # ) 2層に、褐色土ブロック。		
D4	3	E 3、D 3 ( 円 )			106+95	24.5	第 33 図 参 照		
D5		F 2、E 3	円		78	29.5	1# 單褐色粗砂。青褐色ブロックを含む。		D5→D6
D6		E 2、E 3	楕 円	N-33°-W	85+65	4	1# # ( B軽石多い。)		D6→D5
D7		E 2	楕 円	N-35°-E	104+90	49	1# 黒褐色粗砂 ( # ) 2層、1層に褐色土ブロック。		
D8		E2+3、F2+3	楕 円	N 87° W	108+95	32	1# 單褐色粗砂 2層、1層に褐色土ブロック。		
D9		D 3	円		90	14.5	1# 單褐色粗砂 ( B軽石多い。)		
D10		C 3、B 3 ( 円 )			98	16.5	1# # ( # )		D10→H-6
D11		B 4、C 4 ( 円 )			103	21	1# # ( # )		
D12		C 4、C 5	円		115	45.5	1# # ( # ) 2層、1層に褐色土ブロック。		
D13		B 4、B 5	円		80	11	1# # ( # )		
D14		F 3 ( 円 )			77	14.5	1# 灰褐色粗砂。		
D15		F 3	円		100	17	1# #		新旧不明
D16		D 5	円		89	22	1# 單褐色土粗砂 ( B軽石多い。)		D16→D17
D17		D 5	円		87	15.5	1# # ( # )		D17→D16
D18		D 5	円		105	25.5	1# # ( # )		D18→D17
D19		D 6、D 7 長 方 形	N 83.5° E	116+93	34.5	1# # ( # ) 2# 1層に褐色土ブロック、炭化物粒混入。			
D20	1	B 6、B 5	円		106	57	1# 灰褐色微砂。燒土粒・炭化物粒わずか混入。		
D21	9	B 5	楕丸形		118	39	第 33 図 参 照		

D22		A 5	円		117	42	1層 灰褐色面砂 2層 紅褐色土。		
D23	1	E 5	円		100	27.5	1層 暗褐色粗砂 (B鉛石多い)		
D24		C 4. C 5	円		100	28	1層 暗褐色粗砂。(褐色土ブロック30%混入。)		
D25	1	Z 4. a 5	円		93	14.5	1層 灰褐色粗砂。 2層 紅褐色面砂。		
D26		B 2	円		104	16	1層 黑褐色粗砂。(B鉛石多い)		
D27		B 2	円		92	10.5	1層 n (n)	新旧不明	
D28		B 2. B 3	円		93	10	1層 n (n) 2層 紫褐色土。		
D29	1	B 2	円		87	49	1層 n 2層 1層に近い黄褐色土40%混入。	D29-H-5	
D30		A 1	円		77	35	1層 n 2層 n	D30-D31	
D31	1	A 1	円		58	35.5	1層 n	D31-D32	
D32	1	A 1	円		89	25	1層 n	D32-D31	
D33	1	Z 3. A 3 ( 円 )		(70)	12	1層 n		D33-D34	
D34		Z 3. A 3	円		124	35.5	1層 黄灰褐色粗砂。	D34-D33	
D35		A 1	椭 圓	N-55°-E	160・75	21.5	1層 暗褐色粗砂。2層 1に、黄褐色ブロック混入。		
D36	24	B 5. A 5	不規円形		136・117	48	第33回 参照		
D37		A 5	椭丸方形	N-8°-W	133・118	33	1層 暗褐色粗砂。2層 1に、明黄色土ブロック混入。		
D39		B 5	円		100・90	29.5	1層 暗褐色土面砂。灰化物わざか混入。		
D40		B 5	円		65	24	1層 n n	新旧不明	
D41	3	C 5. C 6	円		79	21	1層 に近い褐色土粗砂。炭化物・晚上混入。		
D42	4	C 6	円		94	37	1層 n n n		
D44	1	C 6	円		46	23.5	1層 n n n		
D45		G 9	椭丸方形	N-75°-W	133	20.5	第33回 参照		
D46		C 2. C 3	多角形		(86)	16.5	1層 灰褐色土面砂。焼土粒混入。		
D47	1	C 3	椭丸方形	真北	99・66	30.5	1層 暗褐色粗砂。 2層 褐色粗砂。灰化物粒・焼土粒多い。		
D48		C 2	椭丸長方形	N-13.5°-W	152・162	34.5	1層 暗褐色粗砂。灰化物粒・焼土粒わざか混入。		
D49		C 6	椭 圓	N-38°-W	114・104	47	1層 灰褐色粗砂。鉄分比普通砂粒10%混入。2層 暗褐色粗砂。 3層 灰褐色面砂。		
D50	4	D 6	円		118・101	60.5	1層 暗褐色粗砂。焼土粒・灰化物粒わざか混入。 2層 暗褐色粗砂。 n (風化経状)		
D51	4	E 4	円		94・86	40	1層 灰褐色粗砂。鉄分沈着面砂粒10%混入。 2層 暗褐色粗砂。		
D52		C 5	椭丸長方形	N-1.5°-E	120・89	28.5	1層 灰褐色土粗砂。2層 暗褐色土粗砂。 3層 灰褐色土面砂。		
D53		D 4. D 5 E 4. E 5	円		101	67	1層 に近い暗褐色土粗砂。2層 に近い暗褐色土粗砂。 3層 暗褐色粗砂。(3層とも灰化物粒・焼土わざか含む)		
D54		G 8	円		70	(13.5)	1層 暗褐色粗砂。2層 暗褐色土微砂粒質土。 (H-8・12を検査後に検出され上部は削られている。)	H-8・12に切 られていらる。	
D55		G 8	椭丸長方形	N-86°-W	78・26	(29.5)	1層 暗褐色粗砂。2層 暗褐色土微砂粒質土(灰化物粒わざか)。 (H-8・12検査後の検出で上部は削られている。)	n	

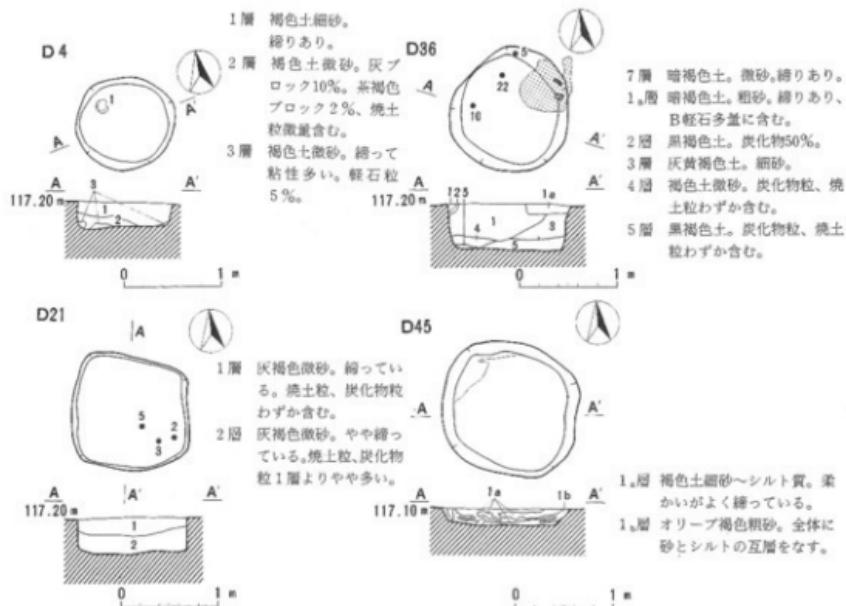
\*出土遺物の数は、1個体の破片であっても、出土破片数としてとられた。



図版27 D25土壤



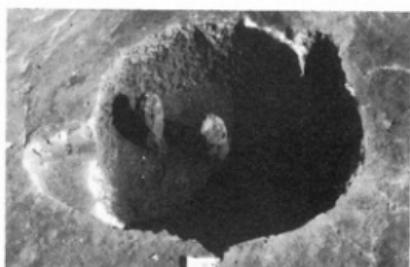
D41土壤 D42土壤 D44土壤



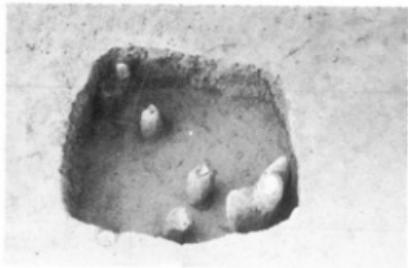
第33図 土壌



D 4 土壌



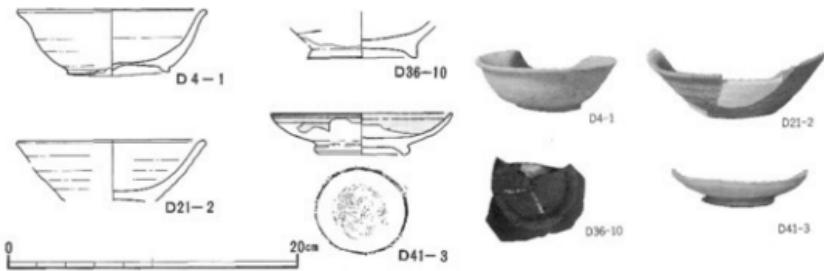
D 36 土壌



図版28 D 16 土壌



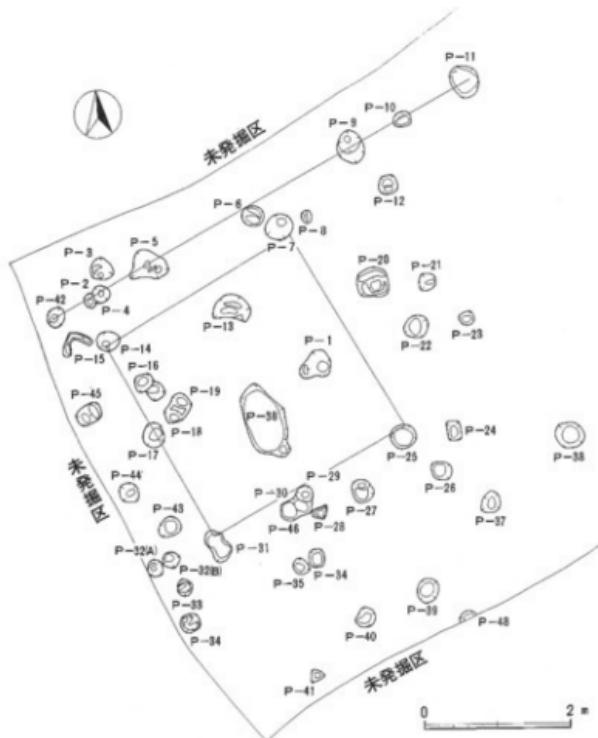
D 45 土壌



第34図 土壤出土遺物 (1/4)

図版29 土壤出土遺物

#### 4 柱 穴 群



第35図 柱穴群

本遺構は、遺跡の北西隅、B 0 グリットを中心とした南北 7 m、東西 6 m の範囲に位置する。北側と西側は調査区域外である。この、ほぼ 42 m<sup>2</sup> の区域内に掘立遺構の柱穴と考えられるピットが 48 検出された。東側では、水田跡の境界と見られる位置で、北側の 2 つを除いて、ピットの分布はなくなる。南側、深掘りの壁では、P-48 が検出されたが、深掘りの壁、または 3 m 南の D 1 グリットでは、全く検出されず、北壁地断面でもピットは見られない。この掘立遺構は、南側でいく分の分布が続き、北側は調査範囲に留まると考えら

れる。一方西壁では、4か所のピットの所在が確認されるとともに、地断のIV層の中に、焼土ブロック30%、炭化物10%を含む層、炭化物が80%を占める層等、北壁、南壁とは全く違った様相の堆積が見られ、本遺構は西側に続くと考えられる。遺構確認面は、IV層であるが、本遺構範囲、特に西壁寄りでは、V層の堆積が明瞭でなく、B軽石の多いIV層中で柱穴が掘られたと考えられる。このことは、柱穴を埋める土にIV層該当層が見られること、P-43において、VI層の直上にIV層が5cm程堆積し、その上の炭化物と焼土の堆積のある位置から柱穴痕が始まっていることを見ても明らかである。柱穴の深さは、VI層をいく分削った確認面から最も深いP-6で65cm、浅いP-40で10cm、大半は、30~40cmである。

## 5 河 川 跡

本遺跡の調査区域の北側地断から、東側地断南寄りにかけ、走向N-25.5°-W、幅2.5~5mの、小河川の流路跡が検出された。耕作面から70~80cm前後の深さに河底が位置し、全体層序のIII・IV層間にその痕跡が見られる。流路沿いにあたるH-7号、H-10号、H-11号の各住居跡、および水田の畦遺構の上部にあたるV<sub>a</sub>、V<sub>b</sub>層中とそれらの遺構にかなり著しい赤褐色の鉄分凝集が見られる。北側の地断、東側の地断中にはレンズ状の河原砂にFP・FA起原の直径1~3cmの軽石が50%含まれる部分(第31図、ア'、イ'地断参照)として検出されるが、どちらの地断にも2か所で見られるので、河川内部で小さな流路変更があったと考えられる。なお、A7グリットにかかる本河川地断中から青磁の小破片1片が検出された。

## ま と め

本遺跡の調査では、以下のことが確かめられた。

検出された遺構で、一番古いものは水田跡である。FAの水性堆積に係わる層(IX、X、XI層)の上層に一層(VII層、およそ30cmの堆積)置いた粘性のあるシルト質細砂層(VII、VI層、30cmに近い堆積)を切って、水田の畦と水田面が形成されている。VII層(鉄分沈着)は、水田に係わる層と考えられる。従ってこの水田跡は、FA降下後かなりの時を経た後作田され、あまり時を経ず、洪水のため耕作が放棄されたと見られる。(全体層序説明4ページ参照。)

次に洪水によって堆積したV<sub>b</sub>層上に、自然堆積がほとんど成されない頃、12軒の竪穴住居での生活が営まれた。出土遺物を概観すれば、①口縁部が肥厚し、かなり退化傾向の見られる「コ」の字壺、②断面三角形のしっかりした鉢を持つが、口縁部がやや長めで、内傾もやや弱まる羽釜、③灰釉陶器のかなり大量な伴出、④土師質皿的傾向の伴出がほとんどない、の4点が指適できる。従って時期的には、10世紀後半から11世紀前葉というかなり短期間に営まれた集落の一部と考えられる。また半数に近い住居から椀状鉄錠の塊が出土していることから、この集落は、北西および北東に広がりを持ち、小鍛冶遺構の存在も窺われる。この集落の最後は、覆土の状況にレンズ状の堆積が顕著でなく、全体にかなりの均一性(V<sub>a</sub>を主体とする。)が見られることから、かな

り短期間に埋没したと思われる。各住居跡の出土遺物の状況は、次の通りである。

これらの住居のうち、H-8号住とH-12号住は重複関係にあり、H-8号住がH-12号住を切って構築してあることから新旧関係は明らかである。またH-10号住とH-11号住、H-4号住とH-9号住、H-6号住とH-5号住の接近の仕方から同時期存在はむずかしいと考えられる。これらの事および、竪穴住居の耐久年数を考えた時少くとも二時期以上に亘る建て替えが考えられるが浅学のため、時期の違いを遺物の様相から押さえることができなかった。ただH-6号住とH-4号住、H-8号住から、同一個体の破片が検出されたことは、この三つの住居で同時に生活が営まれた時間があったと仮定できるのではないだろうか。なおH-6号住では、同じ住居の中で北竈と貯蔵穴と低い床使用の時期、南竈と上の床使用の時期があり、他住居と比べ、長い期間住居として存続したことも考えられる。このH-6号住跡は、12軒の中で、最大の規模を持つ事実の他、棚状遺構を持つ事、遺物量の多いことも合わせて、特殊な性格を持つことも考えられる。

53基の土壙は、B軽石の純度の高い土で埋まっていたものと、V<sub>n</sub>層にかなり近い砂質の土で埋まっていたものの2つのグループに分けられる。住居跡との重複は、D54、D55を除いて前者のグループに入り、すべて住居跡より新しい。数少い出土遺物は、住居跡のものと時期的に平行すると考えられるので、住居跡といく分平行する頃からB軽石降下の頃に造られたと考えられる。  
近隣では、高崎市の上滝遺跡で本遺構に似た平面プランと規模を持った中世～近世の土壙群が検出され宋銭を出土している。時代は異なるが本遺構も墓壙の可能性は大きい。

柱穴群は、掘立柱建物遺構と思われるが、未発掘部分が多く残ることと、何度かの建て替えのため遺構としての組み立てはうまくいかない。しかしこの遺構が、B軽石の純度の高いIV層中に存在し、多量の焼土と炭化物の堆積を持つことから、B軽石降下からあまり時間を経ない頃建てられ、焼失したものと思われる。

以上本遺跡の時間的な流れを追ってみたが、周辺の遺跡との関連を考える時、前橋台地上で

住戸番	上 部 装 置		下 部 装 置		状 態 测 器		鉄製品	鉄錠	その他	備 考		
	环	壁	小要箇	台付箇	环	端	合・要	羽差	三	端	底・合	(注)つくるものについての説明
H-1番	○	○			○	○	(○)	○	○	○	○	1.頭部以下なので可能性のみ。
H-2番	○				○	○	○	○	○	○	○	
H-3番	○				○	○	○	○	○	○	○	
H-4番	(○)	(○)			○	○	○	○	○	○	○	1.土壌質的痕跡、2.脚下部なので可能性のみ。
H-5番			○	○	○	○	○	○	○	○	○	
H-6番	○	○	○		○	○	○	○	○	○	釘	○ 粉鋸末
H-7番	○				○	○	○	(○)	○	○	○	1.胸部1片なので可能性のみ。
H-8番	○	(○)			○	○	○	○	○	○	○	1.口縫から10cm下で8mmの厚さ。
H-9番			○		○	○	○	(○)				1.胸部以下なので可能性のみ。
H-10番					○	○	○	○	○	○	○	1.羽筆状のもの。
H-11番	○				○	○	○	○	○	○		
H-12番					○	○	○	○			刀装具	

※ ○は比較的數の多いもの。

は、清里南部遺跡群<sup>(3)</sup>、中島遺跡群<sup>(4)</sup>、元総社明神遺跡群<sup>(5)</sup>の調査により、ほぼ同時期の遺構が多数検出されている。一方赤城火山斜面にあたる芳賀東部団地遺跡<sup>(6)</sup>、西大室遺跡<sup>(7)</sup>、鶴谷遺跡<sup>(8)</sup>では大規模発掘にも係わらず、本遺跡と同時期の住居跡の集中は見られない。しかし、今後の発見の可能性は十分考えられるので、文化圏の問題は今後の研究に残されるものであろう。

最後に、この調査により、広瀬川低地帯であっても遺跡の存在は十分考えられることの裏付けが成されたことと、この遺跡地を覆う砂地が、榛名山を起源とするFA・FPの火山噴火物で、榛名山麓に大量に堆積しているものであり、それが磨耗しない状態でしかも利根川系の砂礫を全く含まないで存在することから、洪水で押し流され利根川を越すことなく、この地に留まったと考えられ、この頃の利根川は、この青柳寄居の地の北東を流れていた可能性の大きいことが明らかになったことを再確認したい。

(注1) 井上唯雄氏「群馬県下の歴史時代の土器」群馬県史研究8 およびその後の同氏のご教授による。

(注2) 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業團「八幡原A・B、上池、元鳥名A」1981年。

(注3) 前橋市教育委員会「清里南部遺跡群(III)」昭和55年度。

(注4) 前橋市教育委員会「中島遺跡発掘調査概報」昭和55年度。

(注5) 前橋市教育委員会「元総社明神遺跡Ⅰ」昭和57年度。

(注6) 前橋市教育委員会「芳賀団地遺跡群 第1巻(芳賀東部団地遺跡Ⅰ)」。

(注7) 前橋市教育委員会「富田遺跡群・西大室遺跡群」昭和56年度。

(注8) 前橋市教育委員会「鶴谷遺跡群」 1980年。

## 付編 花粉分折結果

本遺跡では、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して、花粉分折を行った。分折試料は、南西トレンチの地断内から採集した。

全体層序III、V<sub>a</sub>、VI、VII、XII、XIII層のそれぞれからサンプルをとり、試料①、②、③、④、⑤、⑥とした。それらの分折結果は、次の通りである。

### ⑥ (XIV層—C輕石混じりの泥炭質層)

花粉・胞子化石の産出が少なく、全体で43個体である。その中でキク亞科とイネ科が各々14個体と最も多く、次いでヨモギ属が6個体。その他タンボボ亜科、カヤツリグサ科、ネナシカズラ属、ハンノキ属、ハシバミ属、クリ属、ニレ属、等が1~2個程度検出された。

プレパラート内の状況は褐色から黒色をした有機物片が非常に多い。

### ⑤ (X層、やゝ粘性の黒褐色土層)

⑥試料と同様、花粉・胞子化石の産出が少なく、全体で63個体であった。その中でヨモギ属が23個体と最も多く、これに次いでイネ科(16個体)、クマシデ属—アサダ属(8個体)の他にツガ属、マツ属・コナラ属、コナラ亜属(以後コナラ亜属)、ウコギ科、キク亜科、等が1~2個体程度検出された。

プレパラート内の状況は⑥試料と同様である。

### ④ (VII層、粘性のある褐色土層)

花粉・胞子化石の産出が少なく、全体で95個体であった。その中でヨモギ属が30個体と最も多く、これに次いでウラボシ科(14個体)、キク亜科(16個体)の他にハンノキ属、コナラ亜属、クマシデ属—アサダ属、ケヤキ属、マツ属、等が1~5個体程度検出された。

プレパラートの状況は、⑥と同様である。

③(VI層 粘性のある黄灰色細砂層)

花粉・胞子化石の産出が少なく全体で92個体であった。その中でヨモギ属が31個体と最も多くウラボシ科(17個体)、イネ科(12個体)の他にキク亜科、クマシデ属—アサダ属、ケヤキ属、カエデ属、ハンノキ属、タンポポ亜科、等が1~5個体程度検出された。

プレパラート内の状況は⑥試料と似ているが、それよりも細かな粒子が多かった。

②(V<sub>n</sub>層、灰黄褐色の細かい砂層)

今までの試料と比較して、多くの花粉・胞子化石を産出した。全体で264個体であるが大部分が草本花粉であり、樹木花粉は37個体と少ない。樹木花粉の主なものとしては、ハンノキ属、コナラ亜属、クマシデ属—アサダ属、ケヤキ属、等があげられる。草本花粉はその大部分がヨモギ属(188個体)であり、イネ科の他にタンポポ亜科、タケニグサ属、カヤツリグサ科、カラマツソウ属、ソバ属等が、1~3個体程度検出された。プレパラート内の状況は、⑥試料と類似している。

①(III層、B軽石を多量に含む乾田起源の鉄分凝集の多い層)

多くの花粉・胞子化石(606個体)を検出することができた。その大部分が草木花粉であり、樹木花粉は33個体と少ない。樹木花粉の主なものとしては、ハンノキ属、コナラ亜属、ケヤキ属、クマシデ属—アサダ属、等があげられる。草本花粉は、ヨモギ属が420個体と非常に多く、次いでイネ科(67個体)、タンポポ亜科(13個体)、キク亜科(8個体)の他にクワ科、アカザ科、カヤツリグサ科、カラマツソウ属、アブラナ科、等が検出された。またシダ類胞子は、単条溝型胞子、三条溝型胞子、ウラボシ科、等が検出された。

プレパラート内の状況は、⑥試料と同じように褐色から黒色の有機物片が多い。

以上のように各試料は③~⑥試料について花粉・胞子が少なく、①、②試料では多く検出することができた。プレパラート内の状況は、①~⑥試料まで良く類似し、褐色から黒色の有機物片が非常に多かった。このことは、試料の堆積環境、堆積後の統成作用が比較的同じであったのかも知れない。

このたびの試料の分析結果をそのまま古植生に反映させることは、堆積後の統成作用によって多くの花粉・胞子化石が消失していると考えられるので問題がある。また樹木花粉が少ないこともあって、古植生の変遷について推定することは、困難であるが、各試料において検出された花粉胞子化石の母植物が当時生育していたと考えられる。

表1 青柳寄居遺跡試料花粉分析結果

花粉・胞子化石名	試料番号	1	2	3	4	5	6
<i>Tsuga</i>						1	
<i>Pinus</i>			1	1	2	1	
<i>Cryptomeria</i>				1	1		
T.C.T.		1				1	
AP-1		1	1	2	3	3	0
<i>Alnus</i>		13	14	2	5		2
<i>Carpinus-Ostrya</i>		2	4	4	2	8	
<i>Corylus</i>			2				1
<i>Castanea</i>		2					1
<i>Fagus</i>		1					
<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>		7	9		4	2	
<i>Ulmus</i>			1				1
<i>Zelkova</i>		4	3	3	2		
<i>Rhus</i>			1				
<i>Acer</i>			2	2			
<i>Aesculus</i>		1					
<i>Araliaceae</i>		1				1	
<i>Fraxinus</i>		1					
AP-2		32	36	11	13	11	5
AP		33	37	13	16	14	5
<i>Moraceae</i>		4					
<i>Fagopyrum</i>			1	1			
<i>Rumex</i>			1				
<i>Chenopodiaceae</i>		4					
<i>Thalictrum</i>		3	1				
<i>Macleaya</i>		1	2				
<i>Cruciferæ</i>		3					
<i>Leguminosæ</i>				1			
<i>Artemisia</i>		420	188	31	30	23	8
<i>Carduoideæ</i>		8	1	5	16	2	14
<i>Cichorioideæ</i>		13	3	2	1		1
<i>Gramineæ</i>		67	18	12	12	16	14
<i>Cyperaceæ</i>		4	1				1
<i>Cucurbita</i>							1
NAP		527	214	52	59	41	37
Trizonoporate pollen		1					
Trizonocolpate pollen		1	1	1	1	1	
Trizonocolporate pollen		14	11	2	1	6	
FP		16	12	3	2	7	0
<i>Lycopodium</i>				1			
<i>Pteris</i>					1		
Polypodiaceæ		4		17	14		
Monolete spore		19	1	5	2	1	1
Trilete spore		7		1	1		
FS		30	1	24	18	1	1
Total Number		606	264	92	95	63	43
Pseudoschizaea				7	11	1	



遺跡全景（北から）



見学風景



柱穴群



珪の一部と河川跡断面

東際珪地断イイ付近

図版30



## 青柳寄居遺跡群

昭和59年3月15日 印刷

昭和59年3月31日 発行

発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市大手町二丁目12番1号

印刷 朝日印刷工業株式会社

前橋市元總町67









